

清 水 経 塚

市道中恵土広見線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999. 2

岐阜県可児市教育委員会
清水経塚発掘調査団



中世墓出土 古瀬戸蔵骨器群



一字一石經

はじめに

ここに清水経塚発掘調査の報告書を刊行いたします。

清水経塚は可児市下恵土字清水に所在しますが、当地域を南北に市道中恵土広見線が通過することになりました。

市教育委員会では現状保存をするよう協議しましたが、それが不可能となりやむなく発掘調査を行い記録保存することになりました。

調査結果、江戸時代の一字一経塚、蔵骨器を埋納する中世墓が検出され、江戸時代の民間信仰、中世埋葬方法が明らかになりました。

両者とも県内においての事例は非常に少なく貴重な資料となりました。

最後に本発掘調査にご協力とご指導をいただいた多数の方々に対し、厚くお礼申し上げ、可児地域の歴史を解明するのに少しでも役立てば幸いに存じます。

平成11年2月

可児市教育委員会

教育長 渡 邊 春 光

例 言

1. 本書は、岐阜県可児市下恵土字清水48番地の2、49番地に所在した清水経塚（2121404723）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、市道中恵土広見線建設工事に伴う緊急発掘調査で、可児市教育委員会が主体となって結成した清水経塚発掘調査団が事業主体者である可児市から委託を受けて実施した。
3. 発掘調査体制は次のとおりである。

団 長 渡 邊 春 光（可児市教育長）
副 団 長 宮 島 凱 良（可児市教育部長）
事務局長 奥 村 晴 保（社会教育課長）
事 務 局 課長補佐 奥村 幸彦（同課長補佐）
文化係長 亀谷 泰隆（同文化係長）
調査担当 吉田 正人（同課主任）
庶務担当 水野 真季（同課主任）

現場作業員

渡辺 弘 伊沢 幸一 北西 幸彦 田中 正三 堀部 邦夫 水野 良雄
可児 定夫 西田 和博 所 京子 小佐々美緒 水野テツ子 堀川シズエ
川島富貴子

整理作業員

水野テツ子 川島富貴子 伊藤 美砂 加藤 基弥

4. 本書の編集・執筆は、第7章第6節は、中島勝国氏（可児市古文書調査室）にお願いし、その他は吉田が担当した。
遺物の実測は加藤が、トレースは亀谷、水野、伊藤が、計測は水野、川島が、遺物の写真撮影は吉田がそれぞれ担当した。
5. 蔵骨器内から出土した火葬骨の鑑定は、椋山女学園大学学長 江原善昭先生に依頼し、その鑑定結果をご寄稿していただいた。
6. 発掘調査にかかった総経費6,869,813円であり、全額を事業主体者である可児市からの委託料で賄った。
7. 発掘調査で作成した図面、写真、出土遺物はすべて可児市教育委員会（可児郷土歴史館）で保管している。
8. 発掘調査現場作業及び整理作業中に、下記の皆様方にご指導、ご助言、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。

藤沢 良祐 田口 昭二 三野 親義 可児 大一 長瀬 治義 成尾 孝子(敬称略)
可児市都市計画課

凡 例

1. 方位は磁北である。
2. 遺構、遺物の計測値は、水平もしくは垂直の値である。
3. 使用したレベルの仮原点（K B M）の標高は、100.017mである。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 立地と環境	1
第3章 調査の経過	2
第4章 層序	6
第5章 中世墓群築造以前の遺構と遺物	
第1節 竪穴住居址	6
(1) 遺構	
(2) 遺物	
第2節 中世墓群造営以前の清水経塚マウンドと溝	8
(1) マウンド	
(2) 溝(SD1)	
第6章 中世墓群	
第1節 第1群	9
第2節 第2群	12
第3節 第3群	18
第4節 出土遺物	18
第5節 中世墓群造営の在り方	22
第七章 一字一石経塚	
第1節 埋納土壙	23
第2節 石組基壇	23
第3節 一字一石供養塔	24
第4節 経塚の構築方法	24
第5節 出土遺物	24
第6節 歴史的環境	26
第8章 その他の遺構と遺物	
第1節 遺構	27

第2節 遺物	27
第9章 岐阜県可児市清水経塚出土焼骨について	29
第10章 まとめ	
第1節 一字一石経塚	30
第2節 中世墓群	31

挿図目次

第1図 清水経塚と周辺の遺跡	2
第2図 清水経塚現況測量図	3
第3図 清水経塚マウンド南北断面図	4・5
第4図 清水経塚マウンド東西断面図	4・5
第5図 SB1実測図	7
第6図 SD1実測図	10・11
第7図 中世墓群第1次遺構面実測図	14・15
第8図 中世墓群第2次遺構面実測図	16
第9図 中世墓群第3次遺構面実測図	17
第10図 蔵骨器出土位置図	21
第11図 蔵骨器出土レベル図	21
第12図 経塚関連遺構及び南東集石上層実測図	23
第13図 一字一石経塚埋納土壙実測図	24
第14図 一字一石供養塔碑文拓本	25
第15図 マウンド外及び下遺構実測図	28
第16図 出土遺物実測図(1)	32
第17図 " (2)	34
第18図 " (3)	35
第19図 " (4)	36
第20図 " (5)	37
第21図 " (6)	38

表目次

第1表 一字一石経内訳表	25
第2表 出土遺物観察表	33

第1章 調査に至る経緯

平成6年、可児市都市計画課により、市道中恵土広見線建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての照会があり、市教育委員会は、建設予定地内には清水経塚(212140723)が存在し、付近に可児工業高校南遺跡(2121404231)が存在すると回答した。

まず清水経塚について両者で保存に関する協議を行ったが、設計変更をすることは困難であるとの結論に達し、事前に発掘調査を行って記録保存することとした。

また、可児工業高校南遺跡については、建設予定地内に遺跡の範囲が含まれる可能性があるため、範囲確認調査を実施した結果を見て結論を出すこととなった。

平成7年5月11日付けで、可児市より文化財保護法第57条の3第1項に係る届出があり、これを岐阜県教育委員会に進達した。

市教育委員会は社会教育課を事務局として、清水経塚発掘調査団を結成し、調査体制を整えた。

この後、同年7月1日付けで、市より調査団に対し発掘調査の委託申し込みの依頼があり、7月31日付けで、市教育委員会を立会人として両者の間で発掘調査の委託契約を締結した。

関係法令の手続きは次のとおりである。

文化財保護法第57条の3第1項関係

市教委発平成7年5月12日付可教社第51号(発掘通知の進達)

県教委発平成7年6月27日付教文第38号(指令書の伝達)

文化財保護法第98条の2第1項関係

市教委発平成7年7月28日付可教社第51号(発掘通知の進達)

県教委発平成7年10月19日付教文第653号(発掘調査通知書の受理伝達)

遺失物法第1条第1項関係

市教委発平成7年12月7日付可教社第305号(埋蔵物発見届)

第2章 立地と環境

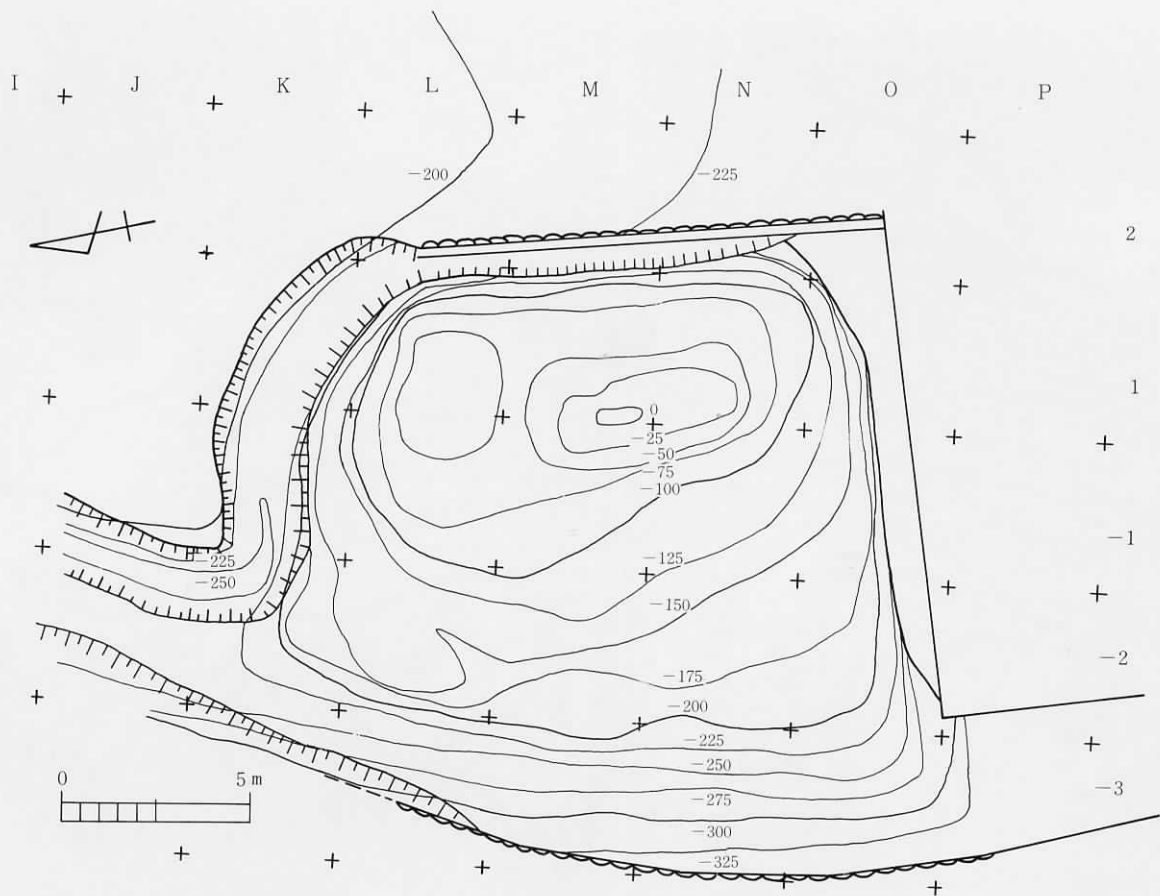
清水経塚は、可児市の北中部、可児市下恵土字清水48番地の2、49番地に所在する。遺跡の所在する可児市下恵土及びその東の中恵土付近は、新世代第4紀に木曾川が開析した河岸段丘のうちの中位段丘上に位置する。

この段丘の南側は、市内をほぼ東西に流れる可児川に浸食され、更にその南側には、沖積平地が広がる。

遺跡は、この沖積地を見下ろす段丘面の南端付近に立地する。可児川との比高差は約9mある。

遺跡の東側には、国指定史跡長塚古墳を含む15基からなる前波古墳群や欠ノ上遺跡があり、すぐ北側には、可児工業高校南遺跡がある。

発掘調査前の遺跡の現況は、竹藪である。マウンド南側と接するように民家が建っており、マウンドが大きく削平されているのを始め、根切り溝、側溝等により、築造当時の姿はおおよそ保っていないことが予想された。マウンド上には、一段高い土盛りがあり、そこには、地元で「ロクジゾウ」と呼ばれる地藏菩薩や五輪塔が数個体安置されていた。



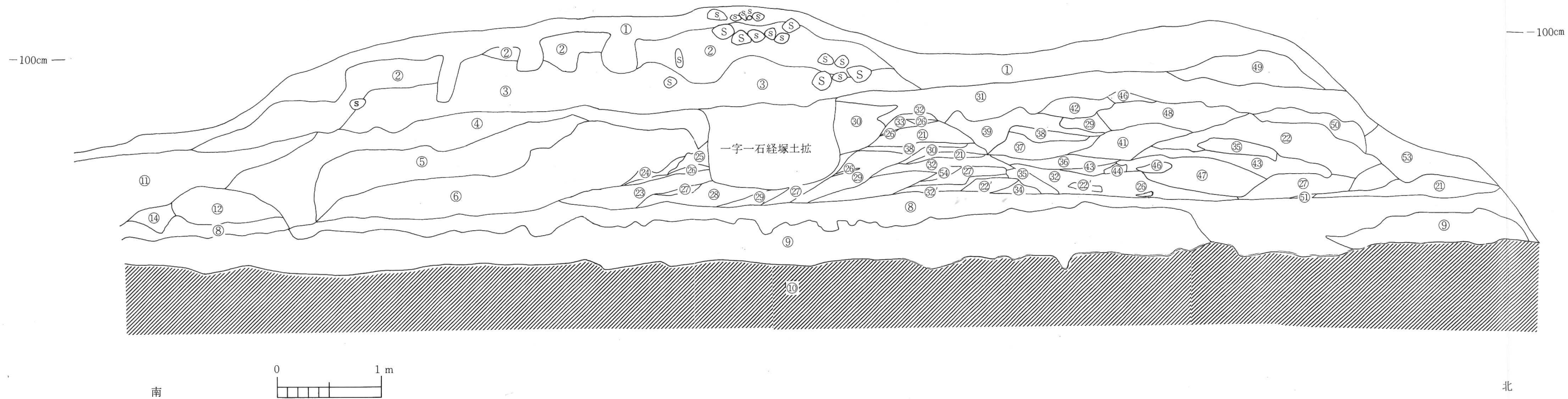
第2図 清水経塚現況測量図 (S=1/200)

その後、東西の中心線列南（西トレンチ）及び南北中心線列西で幅1mのトレンチを設定した。これは古墳の可能性があったため、主体部の追求と盛土の変化を確認するために設定したものである。掘り下げ中に西トレンチからは、褐色土層中より古瀬戸の壺が2個体並んで出土した。最終的に両トレンチは地山まで掘り下げたが、途中黄褐色土層中からは古瀬戸片が出土し、トレンチ断面にも顔を出していた。黒色土層（旧地表）中からは古式土師器が出土した。

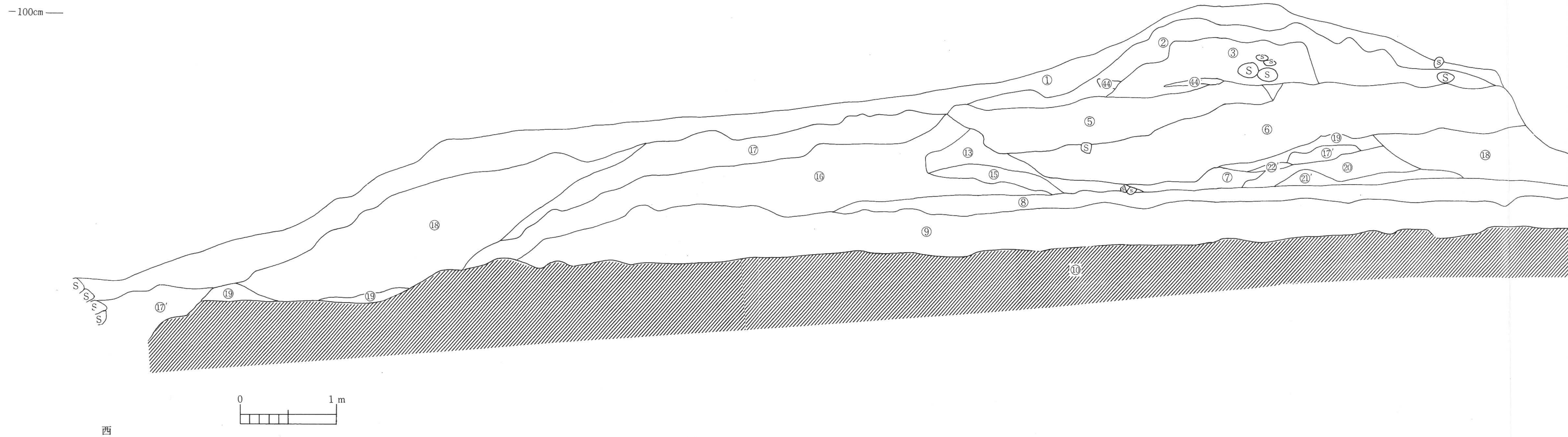
南北中心線の中心から北側列において、砂質土層が検出され、その中から数点の墨書のある小礫が出土した。このため、砂質土層部分を追いかけた結果、平面が方形の土塊を検出した。この方形の土塊の中には、土囊袋約40袋分の一字一石経がびっしりと詰まっていた。この土塊の実測、遺物取り上げ後にマウンド北東4分の1を掘り下げていったが、礫群等の遺構は検出されなかったが、黒色土層まで達すると、この層の中から古式の土師器がまとまって出土した。地山まで掘り下げた後で判明したのであるが、地山を掘り込んだ竪穴式住居址1軒を検出したため、この一括の土師器は、住居址の覆土のものとして判断した。

トレンチを地山まで掘り下げた後、マウンドの残りの部分を掘り下げていくと、中心杭の南部分の褐色土層中からはほぼ一面に大小さまざまな川原石群が検出された。そして、この川原石群の下からは、中に火葬骨を納めた古瀬戸の蔵骨器が多数出土した。尚、川原石の無い部分からも出土している。しかしながら、北側部分からはこのような一面に広がった川原石群は検出されていない。

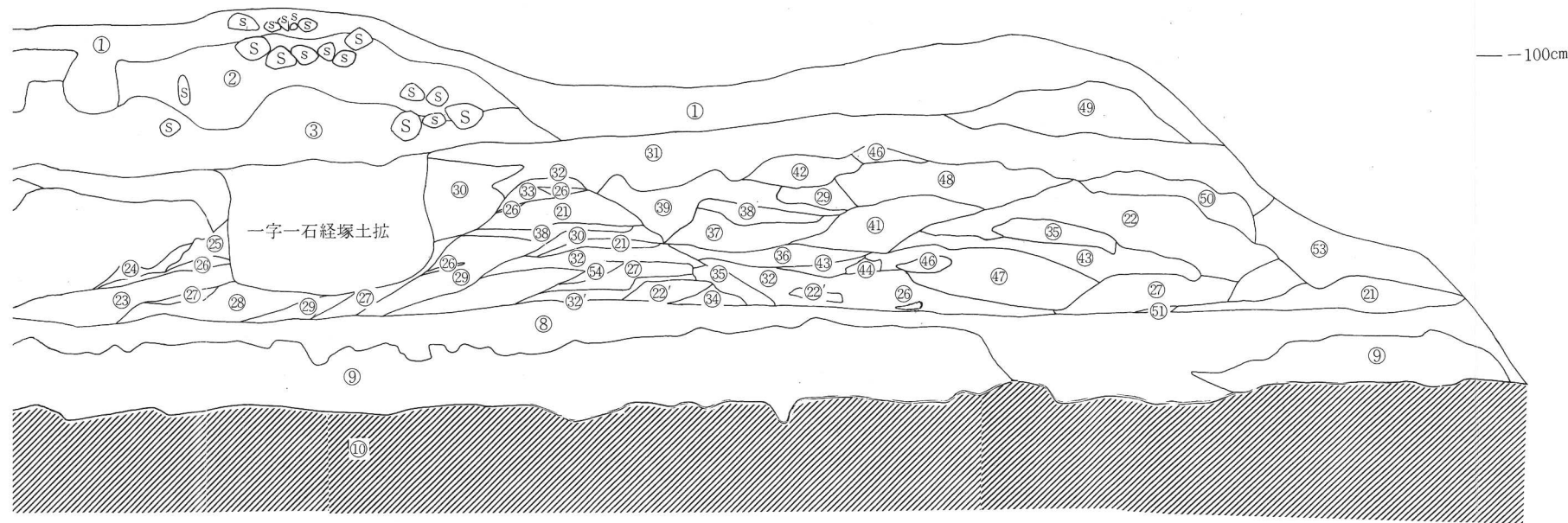
この後、川原石群と蔵骨器群を実測し、川原石群の除去及び遺物の取り上げをした。更にマウンドを



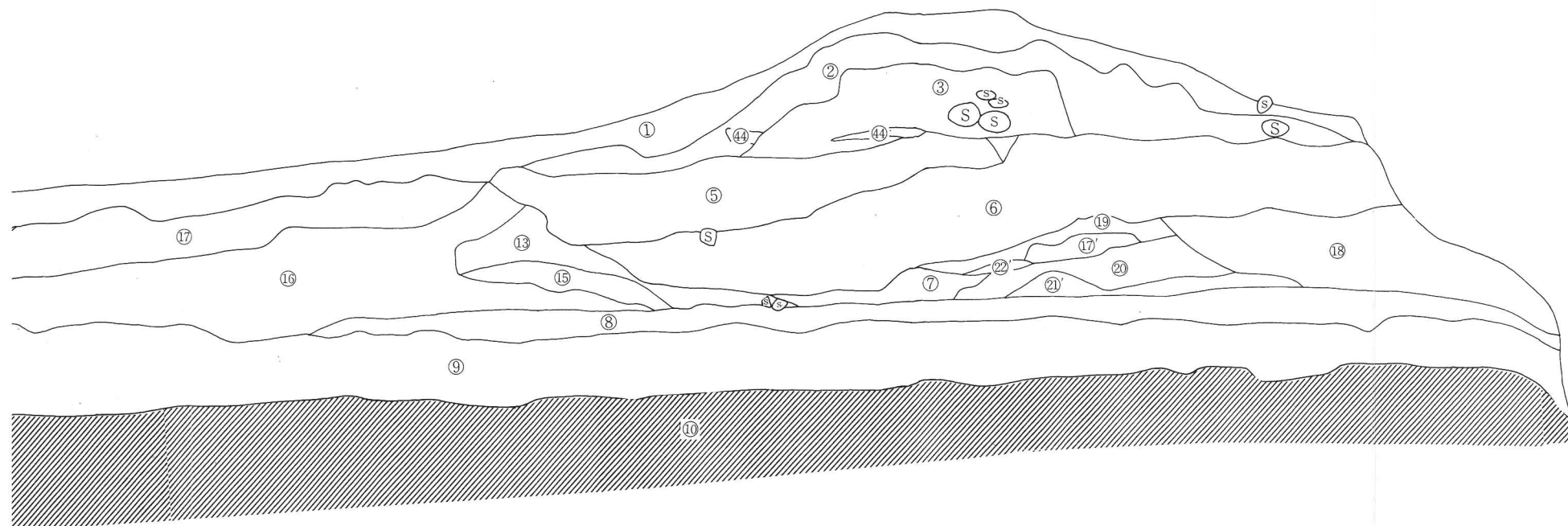
第3図 清水経塚マウンド南北断面図 (S=1/40レベルの基準は 129.3m)



第4図 清水経塚マウンド東西断面図 (S=1/40レベルの基準は 129.3m)



第3図 清水経塚マウンド南北断面図 (S=1/40レベルの基準は 129.3m)



第4図 清水経塚マウンド東西断面図 (S=1/40レベルの基準は 129.3m)

- ① 表土 バサバサ
- ② 茶褐色土 中心から離れるほど粘りかた硬い
- ③ 淡黄土色土 バサバサ
- ④ 褐色土 しまりあり 黄色微粒子含
- ⑤ 淡褐色土 こぶし大の礫(白色系)、白色粘質土混じる 良く締まり固い
- ⑥ 淡黒褐色土 黄色又は茶色の微粒子多含 風化した礫含
- ⑦ 黒色土 白色又は黄色粘質土含
- ⑧ 黒褐色土 黄色又は茶色の粘質土含
- ⑨ 黒色土 旧地表(古式土師器包含層)
- ⑩ 黄褐色粘質土(地山)
- ⑪ 暗褐色土(南セクションでは、10~25cm程度の川原石含)
- ⑫ 褐色土 黄色土多含
- ⑬ 黒褐色土 黄色土、白色粘質土含
- ⑭ 黄土色土 褐色土、黒色土のブロック含
- ⑮ 黄色土 黒色、褐色土含
- ⑯ 暗黄土色土 黒褐色土、ブロック状の黄色土含
- ⑰ 灰褐色土 部分的に黒みがかったところあり バサバサ 礫若干含
- ⑱ 灰色強
- ⑲ 礫層 山茶碗、白瓷含
- ⑳ 黒色粘質土 黄色微粒子含
- ㉑ 黄土色土 黒色粒子含
- ㉒ 黒色土 黄色土含
- ㉒' 黒色土 黄色土多含
- ㉓ 黒色土 黄色微粒子含
- ㉔ 黄色土 黒色土含
- ㉔' 黒褐色土 黄色土含
- ㉕ 黄色土 黒褐色土含
- ㉖ 黒色土
- ㉖' 黒色土 黄色ブロック含
- ㉗ 灰褐色土 黄色土、黒色ブロック含
- ㉗' 黄色土 灰褐色土含
- ㉘ 黄色土 灰褐色土少含
- ㉘' 黄色土 灰褐色土、黒色土含
- ㉙ 暗灰褐色土
- ㉙' 黄色土 黒色土含
- ㉚ 黄色土 黒色土若干含
- ㉚' 暗灰褐色土 黄色土含
- ㉛ 黄色土 黄土色土含
- ㉛' 黄色土 白色粘質土、黒色土含
- ㉜ 灰黒褐色土 茶色微粒子含
- ㉜' 淡灰褐色土 黄褐色ブロック含
- ㉝ 灰褐色土 黄褐色ブロック含
- ㉝' 黄褐色土 淡灰褐色ブロック含
- ㉞ 黄土色土 黄色土含
- ㉞' 淡灰黒褐色土 黄色、黄褐色土含
- ㉟ 淡灰褐色土 黄褐色ブロック含
- ㉟' 黒褐色土 黄色微粒子含
- ㊱ 黄色土
- ㊱' 黒褐色土
- ㊲ 灰黒褐色土
- ㊲' 黒色土 褐色微粒子含
- ㊳ 黄色土 淡灰褐色土、褐色微粒子含
- ㊳' 黄土色土 暗灰褐色土含
- ㊴ 黒褐色土 黄色ブロック、灰褐色微粒子多含
- ㊴' 黄色土 黒褐色斑状、灰白色(若干黄味がる)土含
- ㊵ 黒褐色土 黄色土含
- ㊵' 淡黒褐色土
- ㊶ 黒色及び黄色ブロック混合土

下げていくと、南東部分からは新たに同様の川原石群、蔵骨器群が検出された。これらの実測、取り上げ作業と並行して、マウンドの周囲の掘り下げを行ったが、マウンドの北西から北東にかけて、古代以前の溝が検出された。

その後、残った実測作業や図面の点検をし、現場事務所の撤去等を行い、11月22日に現場調査を終えた。

続いて遺物の整理作業、実測、トレース等の報告書作成作業を平成8年3月31日まで実施した。

第4章 層 序

本章では、清水経塚のマウンドの層序について述べることにする。第4・5図はそれぞれ南北、東西の断面図であり、以下はこれに基づいて説明していく。

まず、基本的な層序として本遺跡のマウンドは、古墳時代前期の遺物包含層である⑨層（旧地表）及び漸移層である⑧層の上に土盛りされて構築されている。東西断面と南北断面では様相を異にするため、別々に述べる。

まず、南北断面であるが、第4図のほぼ中央に位置する一字一石経塚土壙以北では、⑧・⑨層の上にほぼ黒色系土と黄色系土がブロック状に⑩層まで互層をなす。経塚土壙以南では、この互層がなくなり、主に（黄）褐色系の土を中心にして④層まで土盛りされる。一字一石経塚の土壙は、④・⑩層を掘り込んで構築されており、③層より上層はその後に盛られたものである。

東西断面は、南北断面の土壙以南とほぼ同様な様相で（黄）褐色系の土が主に盛られている。この内中世墓群は、⑥層以下⑧層の間で造営されている。

ところで、⑩層は礫層であるが、石の大きさは様々で、石と石の間は隙間が多く、その間に土は少ない。この層は全体に不規則に積み上げられた感じであり、中には64、65の白瓷や、多数の山茶碗の破片が含まれている。また、この礫層は第14図左側の赤線の範囲まで広がっている。層位の状態から中世墓群造営以降にマウンド斜面から滑落した礫や供献された山茶碗を積み上げられたものと考えたい。

最後に、南北断面は未掘部分があるため、東西断面で中世墓群造営時のマウンドの大きさを考えるならば、少なくとも幅（あるいは径）12.1mはあったと考えられよう。

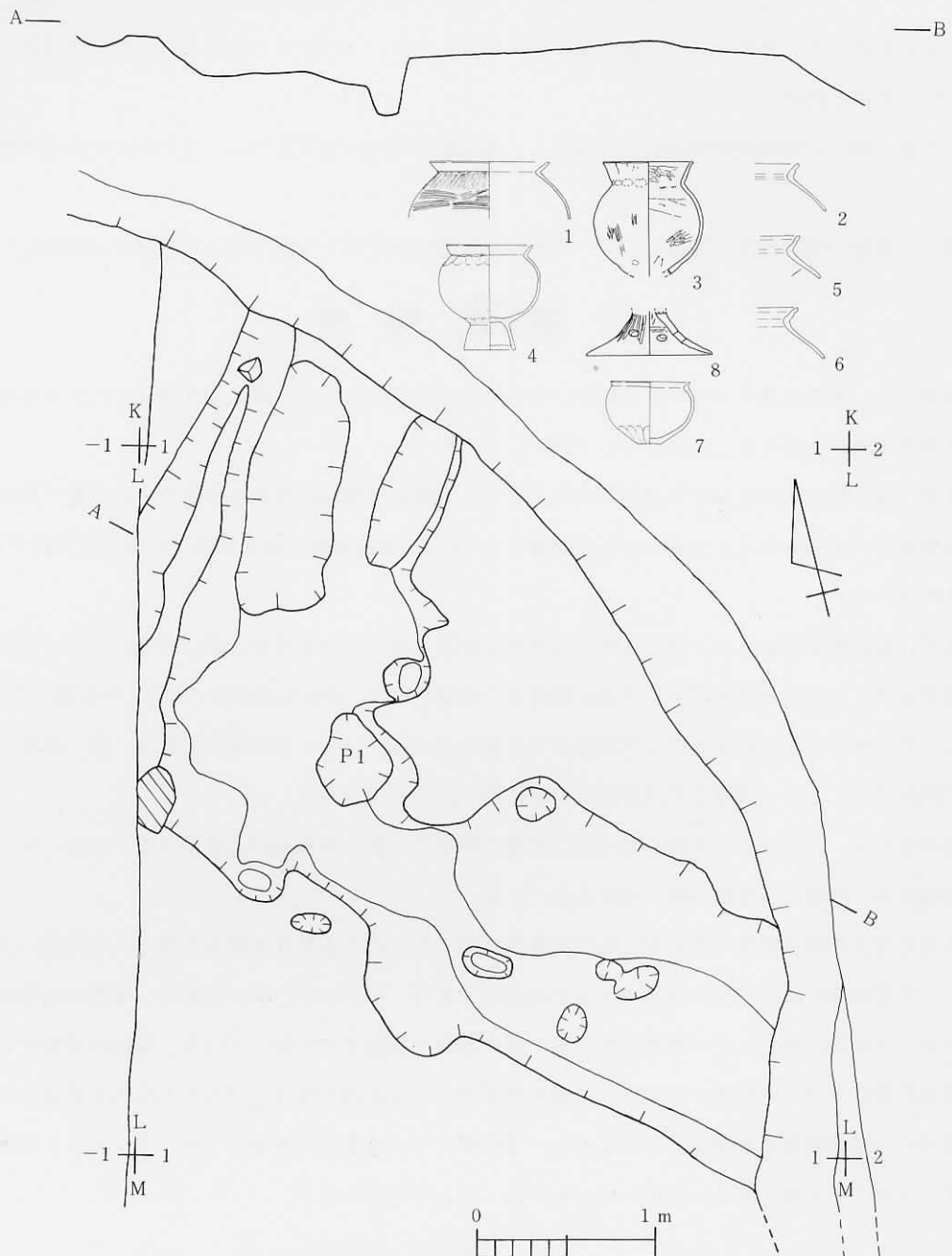
第5章 中世墓群築造以前の遺構と遺物

第1節 竪穴住居址（SB1 第5図）

(1) 遺構

マウンドの南北中心線の北東部分L1区内より検出された。この住居址は、清水経塚のマウンド築造以前の旧地表（第4図⑨層）下に存在したもので、地山（同図⑩層）を掘り込んで築かれている。

近世以降の根切り溝により、住居址の北東部分（全体の約1/3程度）が削平されている。床面の叩き締められた面が確認できなかったため、遺構を構築当時の掘り方面でようやく確認することができただけで、きれいな形での検出はできなかった。検出できたプランによれば、一辺約少なくとも4.8mの方形住居址であったことがわかる。遺構の残存状態が不良のため断言はできないが、検出されたプランの各辺には、周溝の痕跡がみられる。又P1は主柱の可能性が高い。プランの中程部分が、その外側よりも約



第5図 SBI実測図 (S=1/60、遺物1/8)

20cm高く残っており、住居構築の際に中央部掘り残し工法がとられている。この工法は、低い部分に中央のレベルまで改めて土を入れ、そこを叩き締めるものであり、同様な事例は、市内宮之脇遺跡A地点SB7等で確認されている。^(註1) 貯蔵穴は不明であるが、網かけ部分には赤褐色土が検出されており、特にプラン中程の方は、炉址の可能性が高い。

(2) 遺物

調査当初は住居址として認識して掘り下げていなかったため、旧地表内の包含層一括遺物として取り上げたが、後にSB1と断定したため、この一括遺物(1~8)をSB1覆土出土遺物とすることとし

た。

ここからは、S字甕（2・5・6）、くの字甕（1・3・4）、高坏（8）、鉢（7）が出土している。S字甕は、口縁端部が全体に肥厚気味であり、外反する。体部の器厚もやや厚めであり、C類でも新段階に含まれる。くの字甕の内1は、外面がハケメ調整されており、体部の器厚は一緒に出土しているS字甕に比べてやや薄くなっている。おそらく底部には台が付くであろう。4は小型のくの字台付甕で、板状工具により外面を削った後、丁寧にナデ調整を施している。3は当地固有のくの字甕で、口縁端部は外につまみ出している。体部下半には煤が付着している。内面はケズリ調整の後、雑ながらナデ調整を施している。8は有段高坏の脚部であり、脚端部をわずかに内彎させている。7は平底の鉢で口縁端部を短く外へ屈折させている。体下部の1/3程はケズリ痕が残る。

最後にこれらの遺物、つまりSB1の所属時期であるが、高坏は若干古い様相を示すものの、S字甕がC類の中でも新しい段階に含まれるものであり、また、小型の台付甕も併存することなどを考え合わせると、宮之脇遺跡における前Ⅲ期でも新段階、愛知県廻間遺跡の編年では廻間Ⅲ式第4段階に相当すると考える。

このほか旧地中表からは、図化はしなかったものの、SB1と同時期であると考えられる土器片が多数出土しており、当地域一帯に古墳時代前期の集落跡が存在する可能性が高い。この集落跡こそが、可児工業高校南遺跡であろう。

今後この付近一帯は、発掘調査をする必要がある。

第2節 中世墓群造営以前の清水経塚マウンドと溝

次章で本遺跡のマウンド上に検出された遺構については詳しく述べるが、清水経塚のマウンドには、中世墓群と江戸時代末期の一字一石経塚が築かれていた。さて本節では、これらの築かれたマウンドがどのように構築されたかを土層断面から考え、また、マウンド北西部で検出された溝との関係を述べることとする。

(1) マウンド

第4・5図は、清水経塚の東西及び南北の中心線での断面図である。前節でも述べたが、⑨層の黒色土層は竪穴住居址廃絶後に堆積した旧地表で、古墳時代前期の遺物包含層となっている。マウンドはこの⑨層と漸移層である⑧層の上に盛土を行っている。

南北断面では、一字一石経塚の埋納土壌の南約1m部分から北端までは、前述の埋納土壌に削平された部分以外で、⑩層より下の層では、平均して東西幅約0.7m、厚さ0.2mほどの小さなブロック状の単位で黒色土系と（黄）褐色土系の土が交互に盛られている。東西断面では、⑰'⑱⑳㉑'㉒層の間が、南北断面の互層に対応している。

これらの盛土の中からは、中世以前の遺物は出土しておらず、少なくとも古代以前に築造されたと考えられる。また、⑨層下から古墳時代前期の住居址が検出されているため、この住居址より後に築造されたこととなり、必然的に築造された時代は古代ということになる。

残りのマウンド、特に中世墓が集中する南側は、こうした北側の土盛りの在り方とは異なり、①黒色土系の土は使われず、（黄）褐色土系の土を中心に使われていること。②北側のように小さなブロック単

位にはなっておらず、同じ層が広く、長く続くことなどから、中世墓のために新たに盛られたと考えたい。こうしたことから、北側部分に関しては、時代的なことやその盛土方法の特徴から、古墳のマウンドの可能性を残していると考えたい。^(註2)そして、清水経塚のマウンドは古墳の残丘を利用し、中世墓群造営の段階で不足部分を盛り、さらに、一字一石経塚造営のためにこの上に土盛りをして現在の形を形成したということができよう。

(2) 溝 (SD1 第6図)

マウンドの北西部分から北側にかけて、旧地表から地山(⑩層)を掘り込んで、斜面を形成するSD1を検出した。西側は、中世以降の赤道に伴うと思われる溝に削平され、更に北側は未掘の部分があるため断言はできないが、検出された状況での最大の幅は3.4m、深さ0.5mを測るため、これ以上の規模が推測される。現状では、円弧状を呈する。検出した部分が一部のため、最終的にどのような形状になるかは不明であるが、危険を覚悟で復元するならば、直径20.48mの円を描くことになる。

この溝がどのような性格のものかは、将来の周辺調査に委ねたい。

さて、この溝からは9の広口壺を始め、同一個体と考えられる壺片が溝内の☆印を中心に溝の底近くから出土している。9は口径22.7cmを測り、器面は摩耗が著しい。形状から弥生時代後期、山中式の範疇に入るものと考えられる。したがってSD1も同時期と考える。

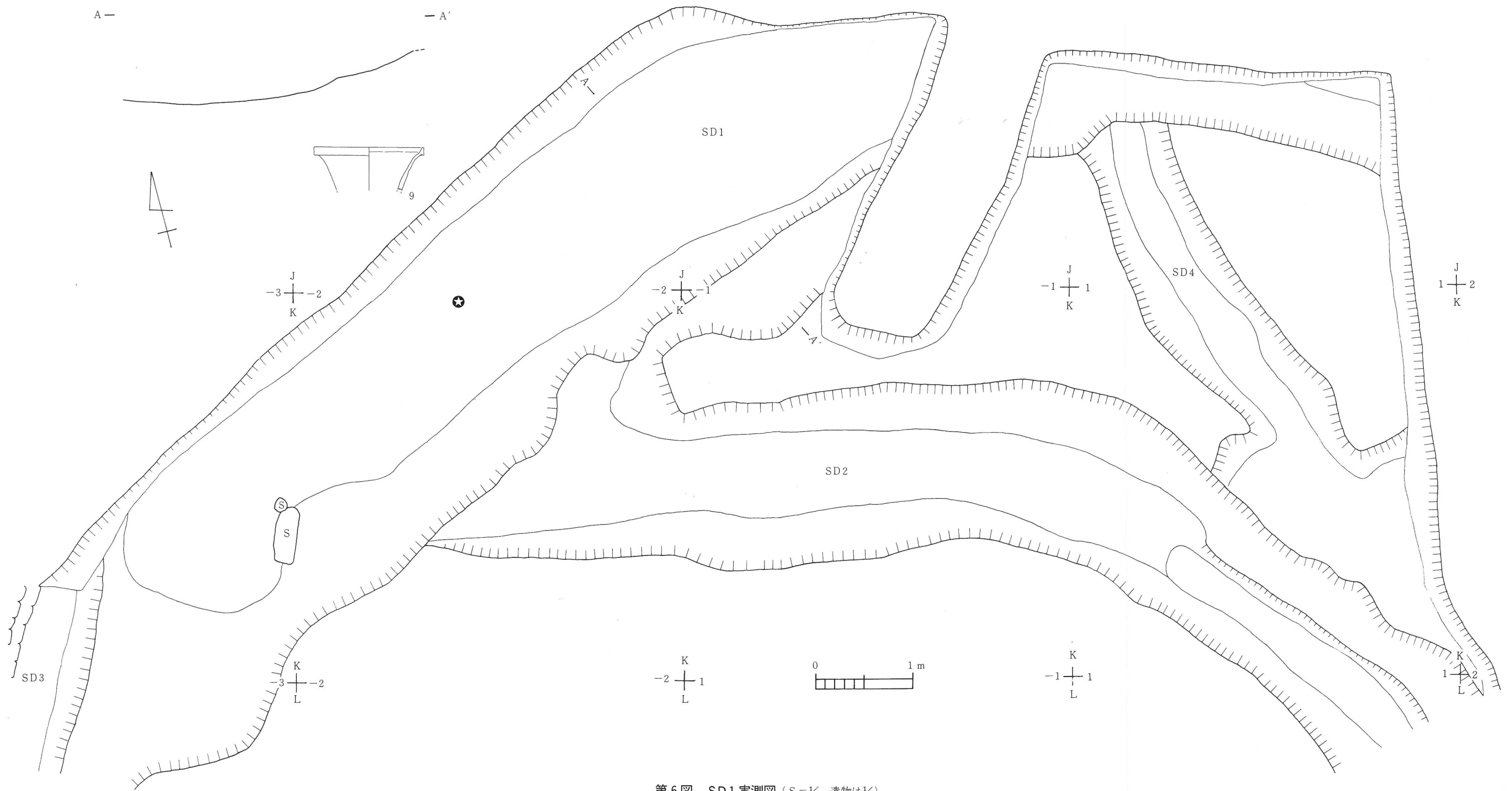
(註) 1 拙稿「第3章 宮之脇遺跡A地点第4節」『川合遺跡群』可見市教育委員会1994

2 この点について田口昭二氏から、多治見市虎浜山2号墳のように石室を持たない古墳があるのご教示をいただいた。

第6章 中世墓群

次章で述べる経塚遺構下のマウンド盛土中から少なくとも^(註1)33個体の蔵骨器が埋納された中世墓群が検出された。面的に見るとマウンドの北東部分を除く部分から検出されており、大きく見れば3つのグループに別れる。(以後、中心杭の北西部分を第1群、同じく南西部分を第2群、南東部分を第3群と呼ぶことにする)。密度としては、マウンドの中心杭よりも南半分集中しており、南及び東側斜面が大きく削平されているため、更に広く、大きな中世墓群があったことが予想される。特に、東斜面には蔵骨器が露出しており、広がる確率はかなり高い。

検出された中世墓群は、長さ50cm程度のかなり大きなものから拳大のものまで様々な大きさの川原石が第1群を除き、あたかもほんとの川原のように一面に広がっていた。最初に検出された面(第1次遺構面)には、川原石群の中に蔵骨器(片)や五輪塔の石が所々に顔を覗かせていた。また、第2・3群は、第1次遺構面の下から、2層(上から第2次、第3次遺構面とする)に亘って蔵骨器が出土している。ここでは、3つの群についてそれぞれ概要を述べ、各蔵骨器の出土状況を記述する。遺物としての蔵骨器の記述は、器種ごとにまとめて述べる。



第6図 SD1実測図 (S=1/6、遺物は1/6)

第1節 第1群 (第7・8・9図)

この一群は、マウンドの中心杭の北西部分、M-1、-2、L-1、-2区で検出されている。この一群は他の群とは異なり、川原石の載る層が黒色系を呈するほか、一面に密集した川原石群ではなく、長径30cm前後のやや大き目の川原石で、細かく見ると7つの集石と1つの土壌墓で形成されている。

1-1、1-2、1-6集石は、幅0.5・6m、長さ0.8~1mの方形に配石され、1-4、1-5集石は、幅0.8m、長さ0.9mの方形に石を巡らせている。両集石、特に1-5集石は形が大幅に崩れている。^(註2)1-3集石は、径2・3mの石を使って一辺約0.9mの正方形に配石されており、周辺にはその上に集石されていたと考えられる石が散らばっている。32の瓶子は、1-4集石上に倒立した(偶然のものと考えられる)状態で出土している。また、1-5集石のすぐ北側では、47の五輪塔火輪が出土している。1-7集石は、1-6集石と同様の形態・規模であったと考えるが、形が崩れかかっている。1-1から1-7集石を実測終了後断ち割ったが、いずれも掘り方は確認できなかった。第7図は攪乱を受けた川原石を取り除いた時点での遺構を実測したものであるが、この状態にするまでに相当数の川原石が周囲に散乱していたことを考えると各集石の上に蔵骨器が載せられ、蔵骨器を包み込むように川原石が積まれてきたと考えられよう。

1-8土壌墓は、1-5集石のすぐ西側で検出されたものである。1-5集石とは、レベル的に0.1・2m程低いところで検出されている。元々は直径0.65mの円形の土壌であったと考えられるが、西側約1/2が後世に攪乱を受けている。深さは最深部分で0.31mを測る。第7図でわかるように土壌底面は平らであり、底面の中心を若干掘り込み、そこへ川原石を置き更にその上へ常滑産の底部及び頸部を打ち欠いた壺が置かれている。中からは、人骨を含めた遺物は出土していない。

尚、1-8土壌墓のすぐ西側からは、66の勾玉が出土している。

第2節 第2群 (第7・8・9図)

第2群は、中心杭の南西、N-1、-2、O-2区で検出した一群である。後で述べる第3群もそうであるように、両群の南は民家に隣接しており、マウンド端まで掘ることができなかったため、未掘部分がある。

範囲としては、東西4m(西の角では5m)、南北は発掘範囲で4.5mの広がりを持っており、南へは更に広がる。層位的には、すべてが⑦層以下褐色系の土層上面で検出されている。第一次遺構面では、大小様々な大きさの川原石が一面に広がり、東へ行く(レベル的には高くなる)に従い、川原石が幾重にも不規則に重なり、層が厚くなっていた。この川原石の集石の中には、攪乱により原位置を保たない蔵骨器の一部(42)や五輪塔の火輪、水輪などが混じり込んでいた。また、この時点で石と石の間からその一部が確認できた蔵骨器は、10、15、18、24、25、31、33、40である。これらの蔵骨器は周りを川原石に囲まれていたものの、区画として大きな石を使った形跡は石を取り除いていく途中では、確認できなかった。また、川原石を取り除いた後、蔵骨器が埋納されたときの掘り方を取り上げ後の断面から観察したが、覆土が同系の褐色土のためか、いずれも確認できたものはなかった。この面で確認できた蔵骨器の内、確実に蓋として意識した石が載せられていたものは、15と40の2個体である。また、15、31、40内には、火葬骨が埋納されていた。

また、集石群の北東角のすぐ外側には、蔵骨器28・29がつぶれた状態で出土している。この2個体は検出時にそれぞれ2個の小礫がすぐ脇にあるものの、ほかの蔵骨器とは異なり、集石の中に埋納はされておらず、単独で褐色土中に埋納されていた。断面観察を行ったが、明確な掘り方は確認できなかった。尚、両者とも少量の火葬骨が伴って検出されている。

この第1次遺構面で検出した川原石群と先に挙げた蔵骨器群を取り除いた後に検出されたものが第8図の第2次遺構面である。この面では、大きく6つの集石群に分けることができる。以後、2-1～2-6集石とする。尚、集石中に蔵骨器が埋納されているものは、集石墓とする。

2-1集石墓は、周囲の石は長径が3・40cmを測るやや大きめの川原石が使われており、その内側には、拳大の川原石が集石されている。外側の大きめの石は区画のための石と考えられ、検出時の状況では、長辺1.6m、短辺0.8mの長方形プランを呈していたが、西側はえぐり取られているような様相であり、本来は正方形に近いプランをしていたものと考えられる。以上のことから、区画を持つ「積石墓」ということができる。^(註3)

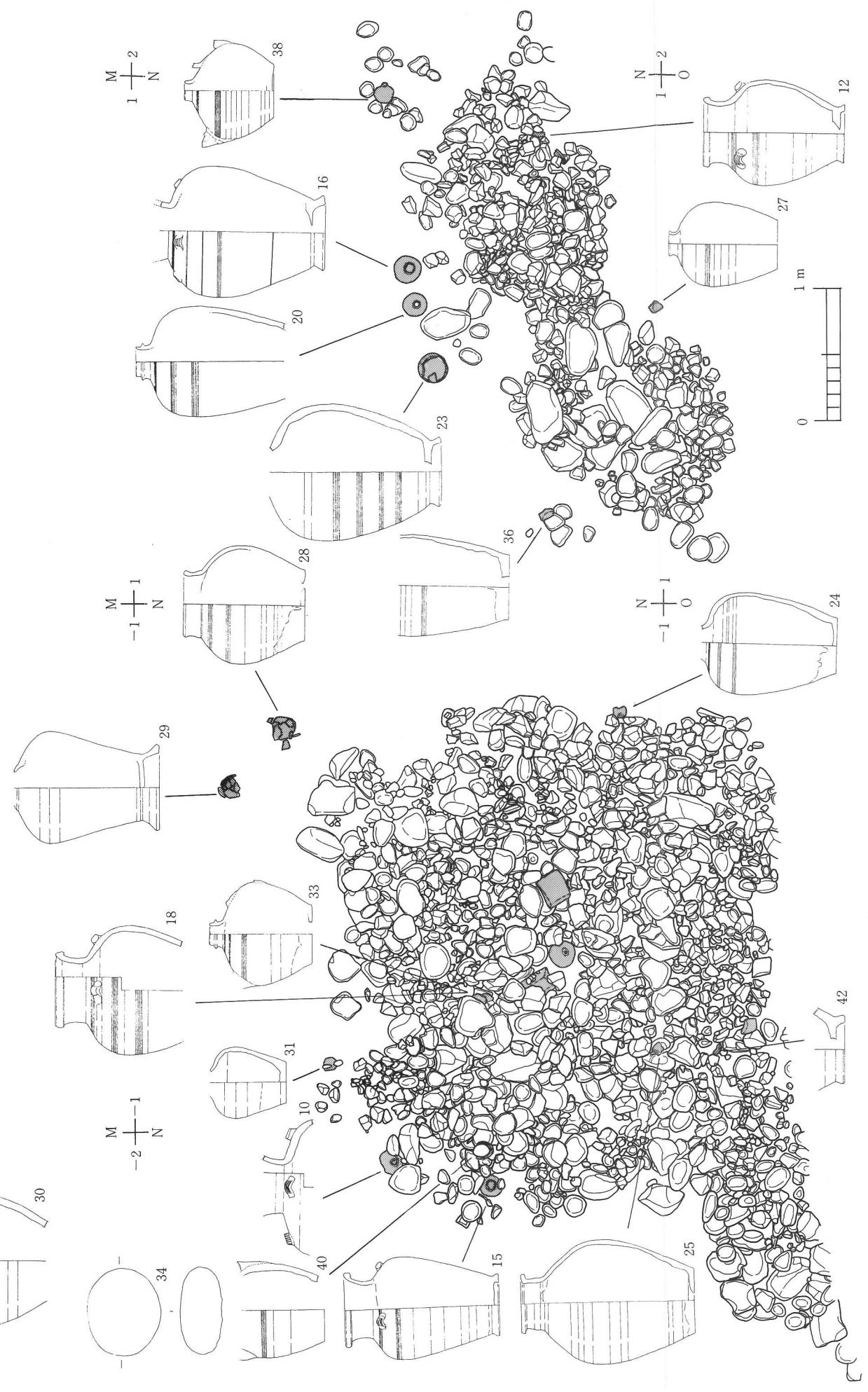
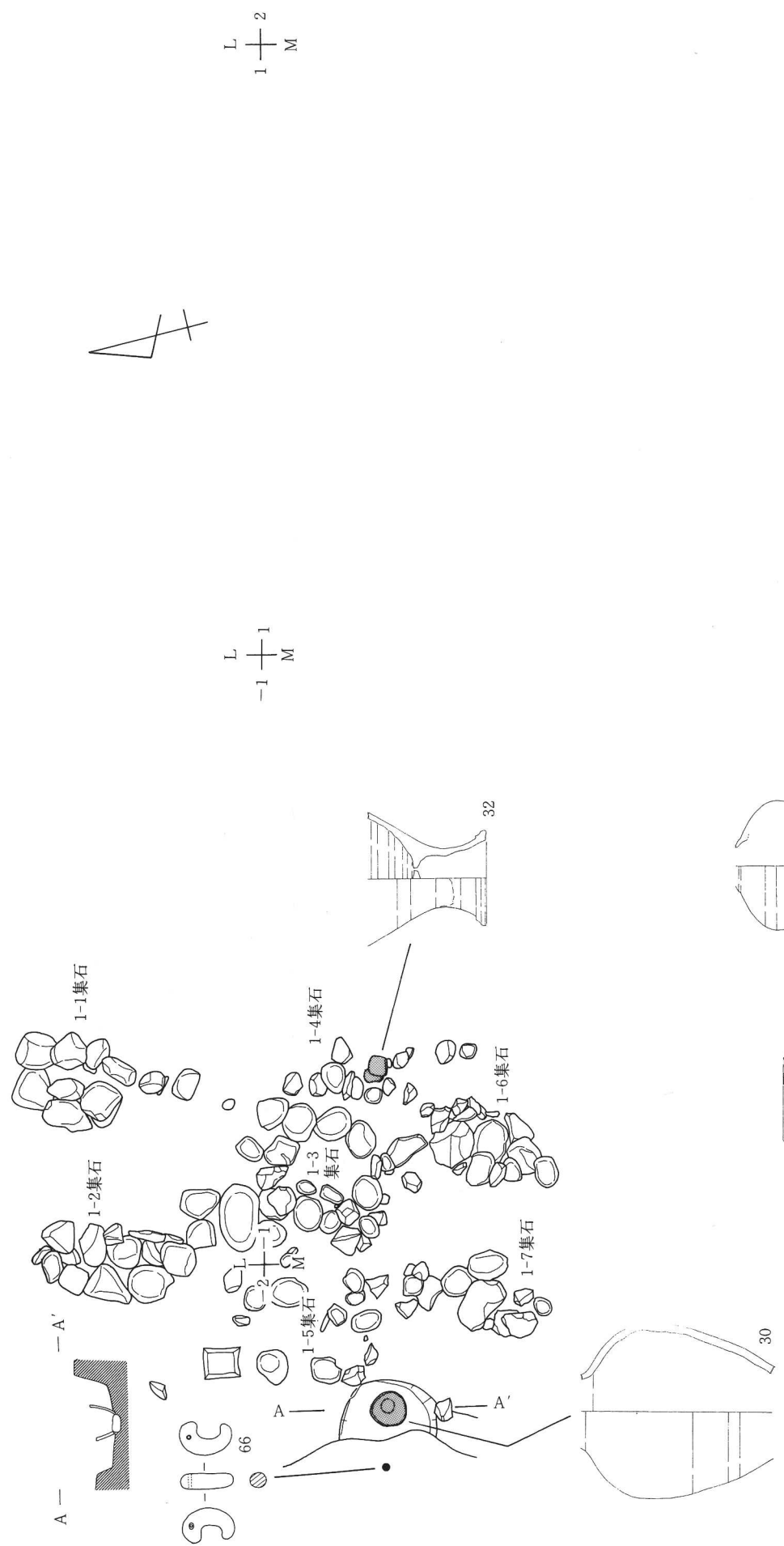
この集石墓の集石をはずすと、中からは口縁部に扁平な川原石を蓋として置いた、蔵骨器21が出土した。第8図上部中央の図は2-1集石墓の断面図である。17は、深さ約0.2m、径0.5mの墓壙の中に納められており、胴下部に蔵骨器本体を固定されるためと考えられる小礫が入れられている。

2-2集石墓は、第2群の第2次遺構面の南西端に位置し、南半分は民家に接したマウンドの端に当たり、発掘することができなかった。発掘状態からは、集石の周辺部は径30cm程度のやや大きめの川原石が使用されているようで、その内側には、拳大の石を使用して集石を形成している。集石の北辺付近に蔵骨器19が埋納されていた。またすぐ西側には、蔵骨器26が横倒しになった状態で出土している。蔵骨器19は、肩部以上が石により押しつぶされたためか、割れた状態で出土している。取り上げの際に断面観察を行ったが、墓壙及び掘り方は確認できなかった。この集石墓の平面プランは、一部しか検出されていないことや、検出状況から北側、あるいは西側の一部で、集積された石を取り除いてしまった可能性があるため不明だが、周縁部分にやや大きめの石が使用されている点を考えれば、区画を持つ「積石墓」の可能性が高い。

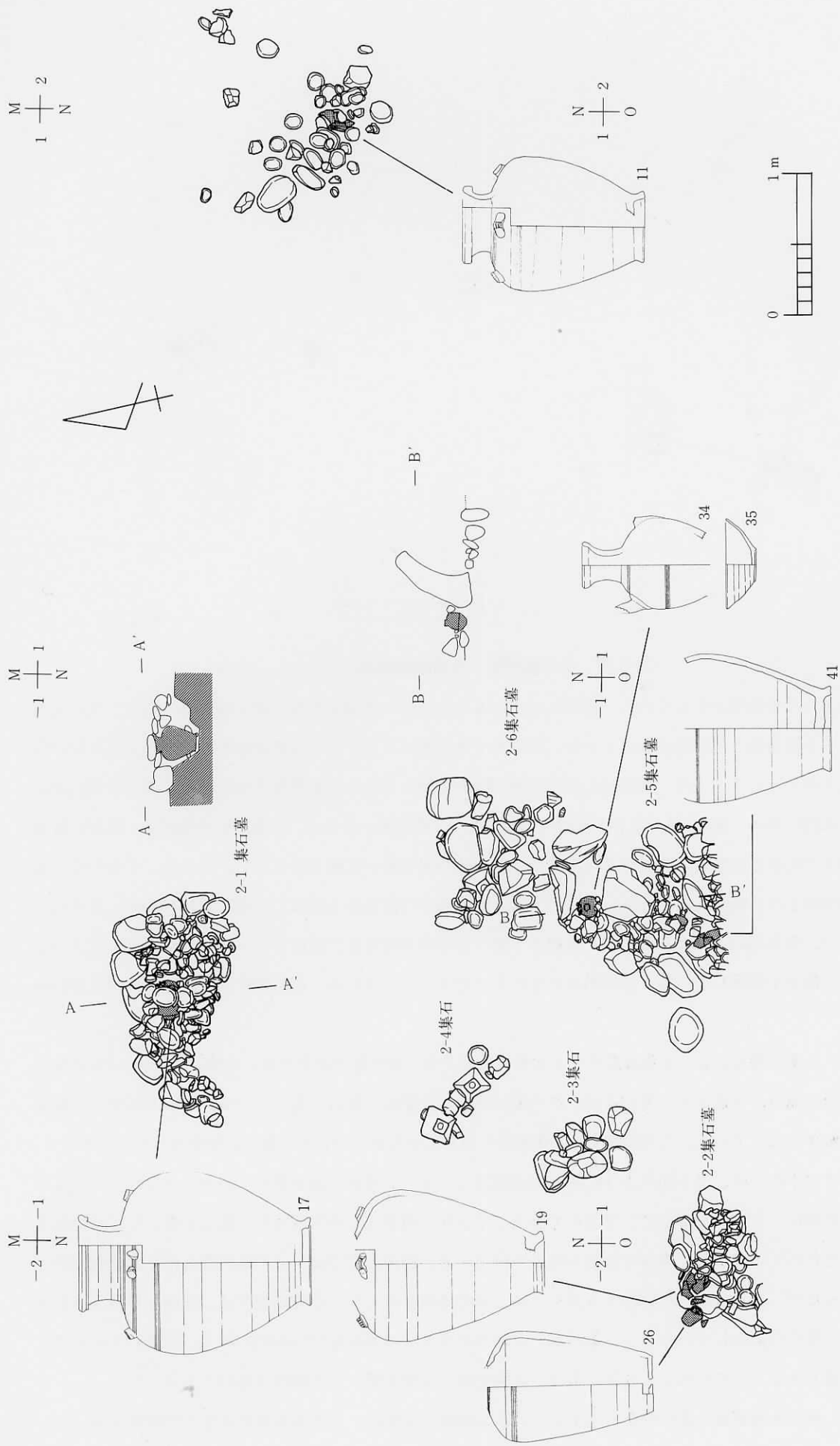
2-3集石は、第2群第2次遺構面のほぼ中央に位置している。この集石は、表面に出ている部分の高さ43cmの細長い川原石を立石として立てた上で周囲に径30cm程度の大きな石を配している。検出時には、10個の石が配石されていただけで、西側には配石がなかったものの、第1次遺構面の集石を除去する段階で取り除いてしまった可能性もあり、また、この集石の中に現在残されている配石の上に集石されたものもあったことは、十分考えられる。プランとしては、立石を中心に直径あるいは一辺約0.7mの円形または方形のプランが予想される。この集石の下部もしくは周縁部には、蔵骨器は出土していない。

2-4集石は、前述の2-3集石の北東約1mに位置する。この集石は、2個の五輪塔火輪(46、51)とその間に同空風輪(45)1個と数個の石からなるもので、集石として取り扱うのは不適当かもしれない。ここにある五輪石は、検出面に意識的に置かれたものと考えられるが、その目的は不明である。また、この下部及び周縁部には、蔵骨器は出土していない。

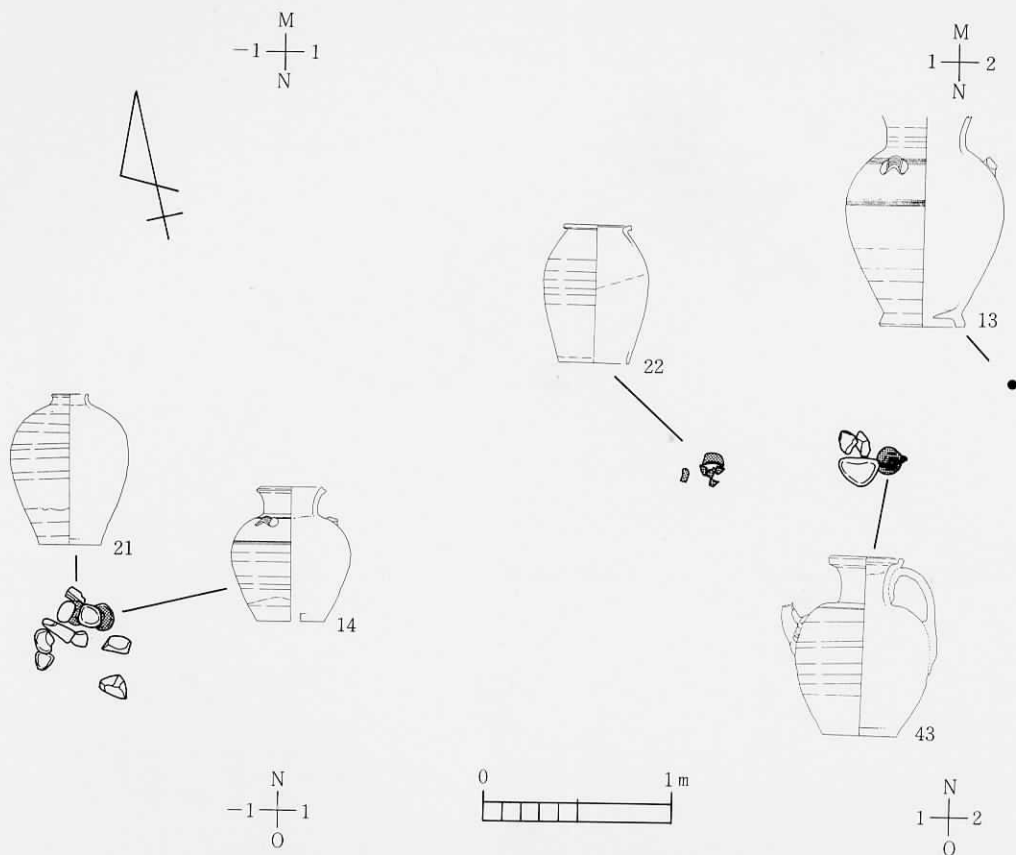
2-5集石墓は第2次遺構面の南西端に位置する。この集石墓も2-3集石と同様に、検出状態では



第7図 中世墓群第1次遺構面実測図 (S=1/40、遺物66は1/4、それ以外は1/8)



第8图 中世墓群第2次遺構面実測図 (S = 1/400, 遺物1/6)



第9図 中世墓群第3次遺構面実測図 (S=1/40、遺物略)

中心よりやや北側になるものの、表面にでている高さ約50cmを測る立石を伴う集石墓である。次に述べる2-6集石墓との区別はしにくい、立石のやや北東に「く」の字に並ぶ長さ約40cmの大きな石が区画石と考えられる。また、検出面の東及び西の端も同様な大きな石が使用されており、現状での計測から、東西1.45m、南北1.2m以上の方形の区画を持つ「積石墓」である。区画石の内側には、立石の周囲に拳大の川原石が集石されており、その中に2個体の蔵骨器が埋納されていた。一つは、立石のすぐ北側に埋納された蔵骨器31であり、もう一つは、調査部分の南端から出土した蔵骨器33である。まず31であるが、第8図のように立石のすぐ北側に下部に山茶碗の碗を受け皿にして、その上に底部を内欠いた水注を載せて埋納している。33は拳大の集石上で出土しているため、原位置は保たれていないと思われる。

2-6集石墓は、2-5集石墓のすぐ北側に位置する。検出時の状態では、北端に長辺約0.4mのやや大きな川原石が2個出土しているが、その他は拳大の川原石の集石となっている。この集石中に五輪塔の火輪が出土している。この段階では、蔵骨器は確認できなかったため、集石の除去を行った。そして、そのすぐ下からは、第9図のように第3次遺構面として、2個体の蔵骨器14・21が出土した。この2つの蔵骨器は、くっつくようにして並んで出土しており、両者ともやや扁平な川原石を蓋として口縁部上に載せられていたほか、周りに数個の礫を伴っている。断面観察では、この集石墓も掘り方は確認できなかったが、出土状況から判断する限りでは、同時埋納と考える。この段階では、区画となるような大きな川原石は出土していないし、集石墓上面のやや大きな川原石もレベル的にみて、区画石とすることは困難である。このため2-6集石墓は、区画を持つ「積石墓」の可能性は低いと考えたい。

尚、第2次遺構面の集石中から出土している五輪塔の火輪は、この集石墓の墓塔の可能性が高い。

第3節 第3群 (第7・8・9図)

第3群は、中心杭の南西、N-1、N-2、O-1区で検出された中世墓群である。範囲としては、調査区南部から北東方向へ長さ約5.6m、幅約2.2mに亘って広がっている。南部分は、第2群と同様に未掘部分があり、また東部分は、調査前から崩壊して崖状になっていたため、調査開始直後から蔵骨器3が崖の壁面から出土していた。このようなことから、南へはもちろんのこと、マウンド東へも広がる可能性が高い。

更に、第2群の第1次遺構面を検出する前、調査開始直後に次章で述べる一字一石経塚基壇検出面とほぼ同レベルで、徳利と湯飲み茶碗のセットが出土したすぐ南において、第11図及び図版1の5段目左のように集石が検出されている。この集石を実測し除去した後に、第15図の右の赤線の範囲で、同様の集石群が図版3の5段目左のように検出している。恐らくこの集石群は、第1次遺構面の中で集石を伴わなかった蔵骨器16、20、23を含めた中世墓群の集石であったと考えたい。この時点では、第1図の東西セクション中の③層と同様、後世一括して川原石を廃棄した礫層と考えたため、後に検出する集石を伴った中世墓群の存在を調査担当者の見識不足で予想することができなかった。そのため、前述した集石の下部遺構という認識で、範囲と断面のみを実測し、写真撮影をただけで集石を除去してしまった。このことから、さらに北側にも範囲が広がると考えたい。

尚、この集石上面より、60の石造阿弥陀如来坐像が出土している。

層位的にも第2群と同様で、集石は⑦層以下の褐色系の土層上面から検出されている。

第3群第1次遺構面では、第2群第1次遺構面と同様に、大小さまざまな大きさの川原石が帯状に集石されており、合計7個体の蔵骨器が確認されている。蔵骨器38は、つぶれてはいたが川原石の集石中から出土しているほか、前述したように蔵骨器16、20、23も集石中に埋納されていたと考えられる。この3個体はつぶれてはおらず、埋納された当時の形で出土した。しかしながら、埋納時の掘り方は確認できなかった。なお、20のすぐ西に隣接する大きな石について、区画石として使用された可能性を否定できない。この他、27・28、36は、いずれも原位置を保っておらず、特に28は広範囲で散乱をしていた。

尚、第1次遺構面の集石を除去した段階では、蔵骨器38のほかは、直下に埋納された蔵骨器はなかった。

第2次遺構面では、蔵骨器38の下から11が集石の中に埋納されて出土しており、更に第3次遺構面では、蔵骨器13、22、43が出土した。いずれも、川原石の集石中に埋納されていたものの(27に隣接するやや大きな川原石が気になるが)、基本的に区画を伴った集石墓ではないと考える。これらは、原位置で出土したものと考えたい。

第3群の東端では、4個体(下から上へ30、43、11、38)の蔵骨器が3層に亘り、繰り返し同じ場所で埋納されており、注目したい。

第4節 出土遺物 (第17～21図)

さて本節では、中世墓群で出土した蔵骨器である壺、瓶子、水注を中心に、器種ごとに主な特徴とそれぞれの属する年代を中心にして述べることにし、^(註4) 細かな法量、調整等は、表2の遺物観察表に譲ることと

する。

蔵骨器は、35の山茶碗、30の常滑産の壺以外は、すべて古瀬戸と呼ばれる灰釉陶器で、美濃窯のもの
は含まれない。

(1) 壺

壺には、三耳壺、四耳壺があるが、底部のみのものもあり、どちらに属するか不明なものもある。19は
胴部最大径が肩部にあってよく肩が張っており、底部に向かって直線的に伸びて細くなっていく。底部
の大きさに比べ胴部最大径が大きく、かつ器高も高い。また、高台も外傾が強いため、不安定さを感じ
る。耳も大きく貫通しており、また釉薬も斑であり、古い様相を示す。10も同様な時期のものと考えら
れる。14は小型の三耳壺で、胴部最大径が肩部よりやや下に落ち、丸みを帯びている。口縁端部は外反
しており、端面は窪みをもつ。胴部径に対し器高が低く、扁平なイメージである。12は全体になだらかな
線を見せて、丸みを帯びる。肩は撫で肩で、口縁部も肩部から緩やかに上方へ伸び、端部は僅かに外
反して肥厚させる。頸部の広いタイプの壺である。高台は外に向かってふんばっており、端部はしっかり
と接地している。端面の中央は僅かに窪む。13もほぼ同時期のものと考えるが、頸部にやや締まりが
あり、胴部最大径も口縁部に対し大きく、肩がやや張った感じであるため、12よりやや古い様相であろ
うか。11は19の系統と考えるが、肩の張りがやや弱くなり、胴部下半が丸みを帯びている。18は12より
はやや肩が張るが、耳に沈線がなく、内部も貫通していない。胴部の沈線は3条あり、最下位のもの
は胴部最大径よりも下に施文される。17は今回出土した蔵骨器の中で最大のものである。全体に丸みは帯
びているものの、各部分にめりはりがあり、安定感がある。口縁端部は折り返しており、この部分を窪
ませたり、へらにより削り込むなどして丁寧^(註5)に仕上げている。15は頸部の広いタイプであるが、胴部が
さほど張らない割に器高が高く、細長い形状を呈する。30は唯一の常滑産の壺で、胎土は砂粒が多い。
口縁部、底部ともうち欠かれている。このほか壺類では、16、19、23、41が口縁部をうち欠かれている。

さて、それぞれの所属時期であるが、10・19は、前II期、12～14は中Ⅰ・II期、11、18、23、37、41
が中Ⅲ・Ⅳ期、15～17は後Ⅰ期、30は6 a・b期^(註5)のものと考えたい。42は脚端部の退化状況から後期の
範疇で考えたい。

(2) 瓶子

底部のみのものも含め、瓶子と考えられるものが12点出土している^(註6)。20、24、26のような梅瓶型と、
29、32のような締腰型（根来型）の2種類がある。梅瓶型では、26、36が底部からあまり広がらずに立
ち上がって肩が張り、古く位置づけられる。20はやや撫で肩で丸みを帯びる。口縁部は頸部から立ち上
がると、横に鋭く飛び出す突起を持つタイプで、この手のものとしてはやや古い様相である。底部は抜
かれている。21、27、31は小型の瓶子で、31以外は口縁部の立ち上がりはわずかで、口径がかなり小さ
い。この3点のうちでは、31が肩が張り、底部へのプロポーションが直線的であることから、古い様相
を示す。この3点は現在の徳利の形態に近い。24の成形方法は、粘土を輪積みした後、ロクロ引きをし
ている。28は広口で底部も大きなタイプである。頸部から短く立ち上がり、口縁部を肥厚させる。胴部
は中央やや上部に最大径を持ち、全体的には寸胴なイメージを持たせる^(註7)。22は小型で広口タイプの瓶子
である。肩部は不明瞭で張りを持たず、口縁端部を短く外へ屈折させる。釉は他のものと異なり、鎊釉
を使用している。底部は抜かれている。25は口縁部が広めのタイプで、28とは異なり、胴部が長卵形を

呈し、頸部は胴部最大径に比べかなり縮まる。頸部から立ち上がった後、口縁部を斜め上方へ屈折させる。釉は22と同様に鎔釉を使用している。

縮腰型の2点は、いずれも後期に入ってからのもので、29は大きめの底部に端部を肥厚させ、しっかりと接地し、外へ向かってよくふんばった高台を持つ。胴部最大径は肩部の位置であり、底部から直線的に立ち上がり、肩部はやや丸みを持つ。釉は灰釉であるが、鮮やかな浅緑色を呈する。32は底部が非常によく縮まり、長さのある高台を持つ。底部は穿孔されているが、他のものとは穿孔方法が異なり、直径3mmの串状工具で焼成前に穿たれている。釉は鉄釉である。

口縁部のうち欠きは24、26、29、31に施されている。

それぞれの所属時期は、26・36が前Ⅲ期、20・21、27、31が中Ⅲ・Ⅳ期、29は後Ⅰ期、24、28は後Ⅰ・Ⅱ期、32は後Ⅲ・Ⅳ期と考えたい。22、25ははっきりと言えないが、胴部の形状から後期の範疇で捉えたい。

(3) 水注

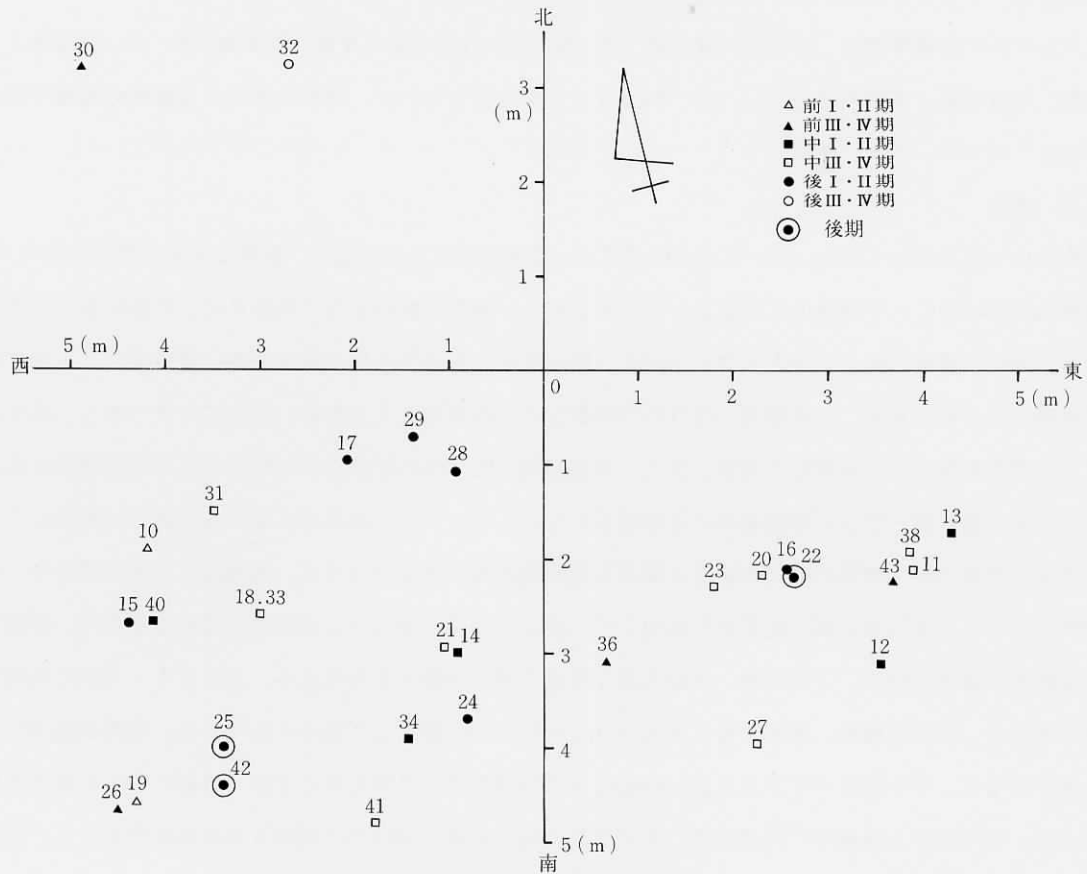
水注は5点出土している。43が5点の中では古い様相を示すものである。胴部はあまり張りを持たず、縦長の球状に近く、口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を斜め上方に屈曲させ、内部は受け口状になる。注口は彎曲しながら上方へ立ち上がる。取っ手の上端は完全に口縁部全体に接着される。前Ⅳ期に所属すると考えるが、口縁端部の受け口が明瞭な点、前Ⅲ期ともとれる。34は43と比べると、胴部がさらに張りを無くし、頸部も不明瞭。また、口縁端部の受け部の屈曲も不明瞭となって退化現象を起こしている。更に取っ手は口縁部全体には接着されておらず、一点に接着されている。注口は彎曲して立ち上がった後、外へ彎曲の方向を変える傾向を残存部に伺うことができる。底部はうち欠れており、その代わりとして受け皿に35の山茶碗を使用している。35は高台がほとんど退化しているものの、器高はある程度の高さを持つ。このため、大畑大洞4号窯式期に所属すると考える。34は中Ⅰ・Ⅱ期に所属すると考える。^(註8)40は口縁部、底部ともうち欠かれており、39が蓋として載せられていた。胴部形態が34より張りがなく、やや胴長タイプである。時期は34と同様中Ⅰ・Ⅱ期と考えるが、Ⅱ期に近い可能性を持つ。33、38は瓶子と同様な口縁部を持つタイプの水注である。33は20と同様な口縁部形態をとる。胴部は33がやや肩が張るものの、両者ともつぶれた感のある形状を呈する。この2点は中Ⅲ・Ⅳ期に所属すると考えたい。

(4) その他の遺物

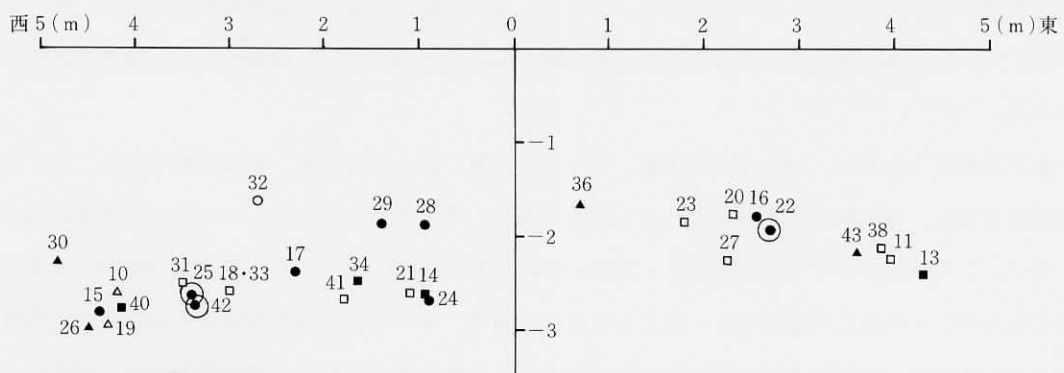
このほか中世墓群に伴う遺物としては、44～54、59の五輪石、60の石造阿弥陀如来坐像、63の香炉が出土している。また55・56、58は蔵骨器の蓋（55・56、58は14、17、21の蓋）として使用された川原石である。

まず五輪石であるが、44・45は空風輪、46～51は火輪、52～54は水輪、59は地輪である。いずれも花崗岩製である。各五輪石は集石中からばらばらで出土しており、またこれらの中から蔵骨器は出土していない。このため、すべて原位置を保ってはいないと考える。ただし、45・46、51、53は2～4集石を構成するものとその直上の集石中から出土したものであり、4つの石の関連性は考えられよう。空風輪は2点とも縦20cm、幅13cmとほぼ同様の大きさである。火輪は笠の幅が20～25cm程度だが、底面の反り具合や笠上部の各辺から頂点へ角度が様々である。水輪は大中小に大きさが分かれる。60は輝石安山岩製

の阿弥陀如来坐像で、第3群第1次遺構面と考えられる集石上面から出土している。高さ29.2cm、最大厚さ10.3cmを測る。坐像は陽刻されたもので、像高16.8cmである。坐像の彫られている表面は丁寧に仕上げているが、裏面は粗い整形である。年号は刻印されていないが、可児市指定文化財である石造阿弥陀如来坐像に似ている。こちらは享徳二年（1453）の銘が入っており、60も同様な時期の作ではなかろうか。ただ、この石仏の方が今回出土した蔵骨器の最も新しい後I・II期より新しくなる可能性を含む。63は古瀬戸の香炉で、マウンド北側の斜面付近から出土している。ただ、この下からは中世墓の検出はないため、原位置からはかなり移動していると考えている。所属時期は後II期と考える。



第10図 蔵骨器出土位置図



第11図 蔵骨器出土レベル図（レベル基準は129.3m、ドットの意味は第10図と同じ）

第5節 中世墓群造営の在り方（第10・11図）

前節では、各蔵骨器の特徴と所属時期について述べたが、本節では、蔵骨器の時期から清水経塚中世墓群の造営の在り方について若干述べることにする。

さて、第10図は蔵骨器の出土位置を時期別に示したものである。まず第1群から。本群には2点の蔵骨器が出土しているが、30が前Ⅲ・Ⅳ期、32が後Ⅲ・Ⅳ期と、埋納の間隔があいている。

第2群では、前Ⅰ・Ⅱ期～後期まで連続して蔵骨期の埋納が行われている。特に中Ⅲ・Ⅳ期～後Ⅰ・Ⅱ期に蔵骨期埋納が最盛期に達する。平面的な出土位置からみると、2個体程度が隣接して埋納されている感を受けるが、それぞれが同時期或いは近い時期のものばかりではなく、15、40のように隣り合っても時期差が開くものもある。第11図は、各蔵骨器の出土レベルを時期ごとに示したもののだが、この図で15、40のレベルをみてもそれほど高低さはない。

第3群は、第2群とほぼ同様に前Ⅲ・Ⅳ期～後期まで連続して蔵骨器埋納が行われるが、特に中Ⅲ・Ⅳ期のものは5点の出土と突出しており、その多さが際立つ。この群の中には平面的にみて、16、20、22、23の西側のまとまりと、11、13、38、43の東側のまとまりの大きく分けて、2つのまとまりがある。これらはそれぞれ連続して埋納が行われる。西の一群のレベル差はほとんどない。東の一群では、13のみやや低い位置での出土であるが、これは出土状態からみるなら、マウンドの崩壊により原位置から動いている可能性があり、西の一群とレベル的にも同様の在り方をしていたとも考えられよう。

以上各群の特徴をみてきた。中世墓群は、2・3群とも前期から後期まで蔵骨器埋納を続け、その最盛期を中Ⅲ・Ⅳ期～後Ⅰ・Ⅱ期に迎える。^(註9)

蔵骨器の器種による時期的な差はないが、水注は出土数が少ないためか、後期に入るものはない。

(註) 1 図化していないものも含めた数である。

2 1-4、1-5集石は1-3集石の残骸とも考えられる。

3 土本典生「第3章遺構」『法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書』一宮市教育委員会1995

4 年代決定は以下の文献を参考に決定した。尚、蔵骨器の年代決定に際し、藤沢良祐氏に多大なご教示を賜りました。

(1) 藤沢良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁No.8』東洋陶磁学会1982

(2) 藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館1991

(3) 藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第3輯』(財)瀬戸市埋蔵文化センター1995

(4) 註3文献「第4章遺物」

(5) 山内伸治「第8章総括」『小名田小滝古窯跡群』多治見市教育委員会1993

(6) 赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって資料集』日本福祉大学1994

(7) 瀬戸市歴史民俗資料館「本多コレクション(1)—古瀬戸—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅳ』1985

5 当該期を古瀬戸編年前Ⅲ・Ⅳ期に並行すると考えている。

6 21・22、27は小壺とすべきかもしれない。

7 藤沢良祐氏より口縁部が片口になる可能性をご教示していただいた。

8 両者の併行関係について、註3-(5)文献では大畑大洞4号窯式期前半を古瀬戸中Ⅱ～Ⅳ期と併行させている。これに沿うならば34は中Ⅱ期とすべきかもしれないが、筆者は35を大畑大洞4号窯式期後半で捉えたいと考えているのでずれが生ずるが、この点については将来の課題としたい。

9 実年代については14世紀中葉～15世紀初頭を考えている。尚、蔵骨器はすべて転用されたものとするので、埋納が本来の生産時期よりも後に下る可能性がある。

尚、第2表の成(整)形技法について成尾孝子氏より、様々の御教示を得ました。

第7章 一字一石経塚

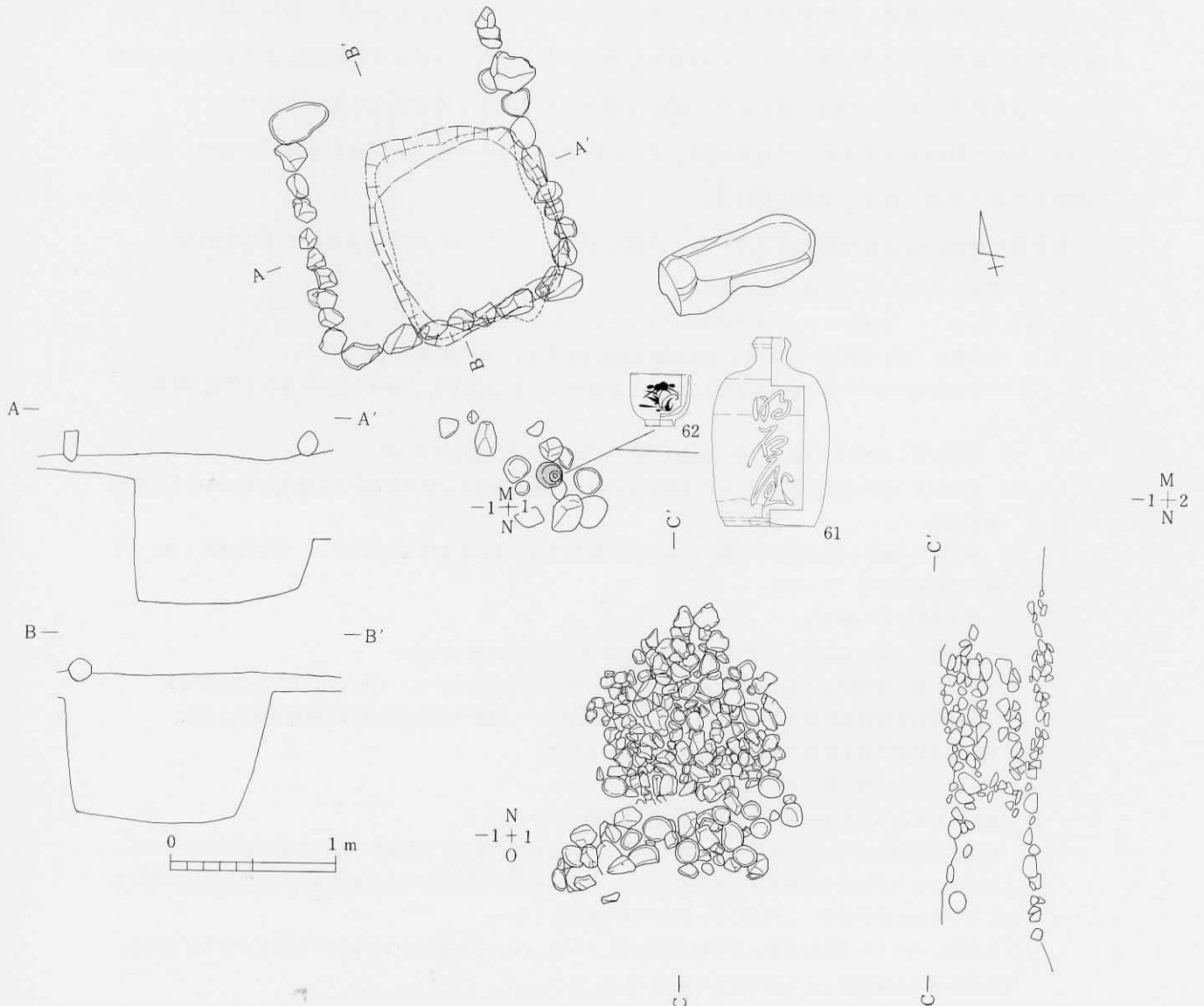
南北中心線のセンター杭の北側約1m、深さ0.7mの地点で、一字一石経塚を検出した。この経塚は、埋納土壇、石組基壇、マウンド及び供養塔で構成されている。

第1節 埋納土壇 (第13図)

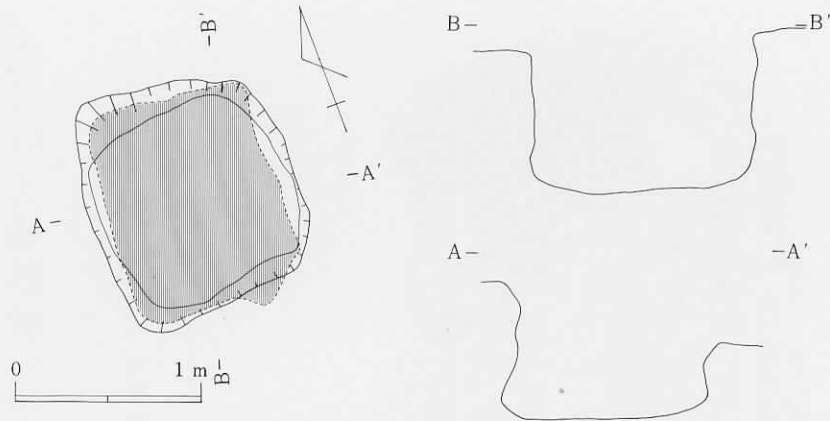
埋納土壇は、第4図の南北断面図からわかるように、中世墓群のマウンドを0.75mほぼ垂直に掘り込んで築かれている。平面プランは、北辺の一部が攪乱を受けているものの、一辺1.1mの方形を呈する。土壇内部は底部から0.55mの高さまで、寸分の余地もないくらいびっしりと一字一石経が納められている。その上部0.2mは、砂混じりの暗黄土色土で埋められていた。

第2節 石組基壇 (第12図)

石組基壇は、埋納土壇の上方0.2mの地点で検出された。一辺1.6mの方形プランを呈する。検出時に



第12図 経塚関連遺構及び南東集石上層実測図 (遺構 $S = \frac{1}{10}$ 、遺物 $S = \frac{1}{20}$)



第13図 一字一石経塚埋納土壌実測図 (S=1/40、網かけ内は一字一石経の広がり)

は北辺には石組がなく、北側に開口した状態であった。ただ、西辺のうち一番北寄りの石が東へ向かってやや突出した状態で組まれており、構築当初には北辺にも石組みが存在した可能性を示している。

この石組に使用されているのはほとんどが川原石で、長径2・30cm前後のものばかりである。

石組内からは、図化不可能な近世の陶器片や鉄くぎ片が出土している。

第3節 一字一石供養塔 (第12・13図)

経塚を示す石塔が表土をはいだ直後に、位置的には石組基壇の東方0.5m、レベル的には基壇の上方0.2mのところから、倒れた状態で出土した。

この石塔は、長さ1.0m、幅0.4m、厚さは平均0.23m(最大厚0.43m)を測る。底面は平坦に成形し、断面は碑文が刻まれる部分は薄く、底面に近づくにつれ、膨らませるように作られている。表面は縦0.7m、横0.18mの範囲で表面を若干窪ませるように成形されている。この部分には、第14図のような銘文が刻まれている。この碑文から、清水経塚が天保6年(1835)に築造されたことが判明した。

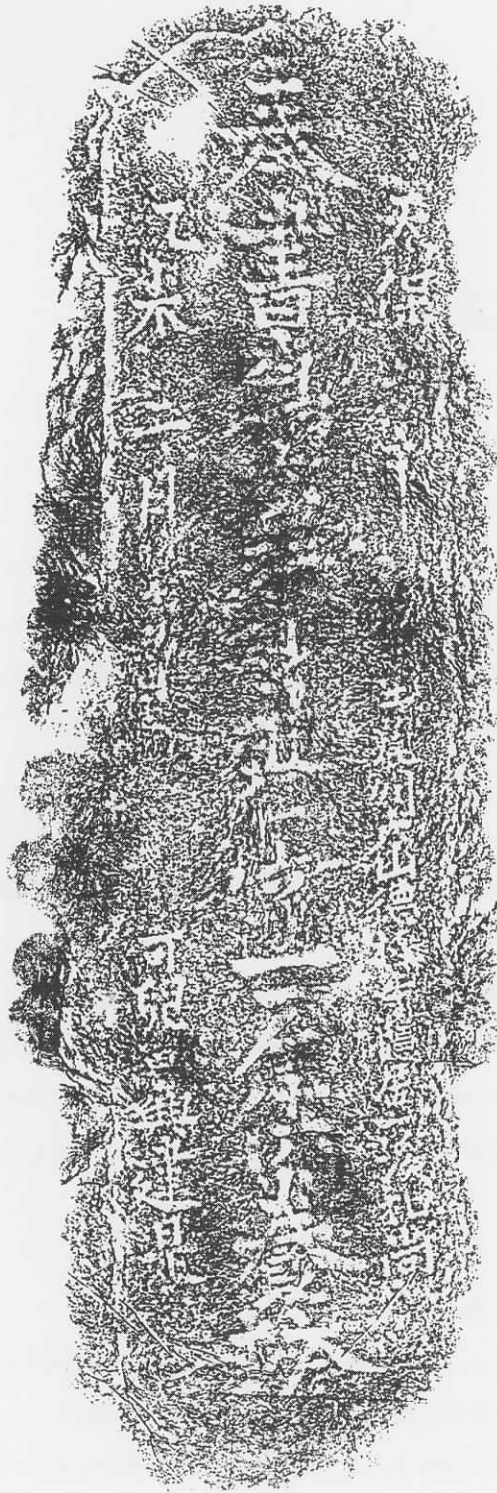
第4節 経塚の構築方法

さて、第4図の経塚南北断面図から、この経塚の構築方法を記しておく。

第一に、中世墓群のマウンドを平坦に整地する。この範囲は、およそ東西5.5m、南北5.6mと考えられる。第二に、その平坦面に埋納土壌を掘り、膨大な数の一字一石経をその中へ埋納する。その上に暗黄土色砂質土を0.2m被せる。第三に、更に褐色土を0.2mほど盛った上に石組基壇を築き、第四に、その内部に褐色土を盛り、土台石及び供養塔を据え付けて完成させている。

尚、石組基壇の南方約1mのところ湯呑み茶碗(62)を伏せた徳利(61)が数個の川原石に囲まれるように出土している(第12図中央部)。レベル的には、石組基壇とほぼ同じであり、また、この徳利と湯呑み茶碗も編年的にみて経塚が築かれた天保年間のものであるため、何らかの形で経塚に供献されたものと考えたい。

第5節 出土遺物



天保六年

尾州犬山徳□寺隱居一□和尚

奉書寫大乘妙典一字一石供養塔

乙未三月吉日

可兒重興建是

区別	大きさ	個数
文字有	小(径3cm未満)	22,193
	中(径3~4cm)	13,350
	大(径4~5cm)	1,169
	特大(径5cm以上)	219
文字無		28,074
読取不明		8,338
合計		73,343

第1表 一字一石経内訳表

(1) 一字一石経 (巻頭写真)

埋納土壌内から出土した一字一石経は、合計73,343個を数える膨大な量であった。一字一石経の大きさ等の内訳は、表1のとおりである。一石経に使用されている石は、そのほとんどが玉砂利に使われるような表面のすべすべした川原石（ほとんどが流紋岩）を意識的に選んで使用している。経文は一個の石に一字ずつ墨で書かれているため、その性質から消えかかったもの、或いは薄くて読み取れないものが8,338個あったが、それ以外に確実に字の書かれていないものが28,074個あり、一石経全体の38%を占めていることは注目される。また文字のあるものは36,931個あり、石の大きさにより4つの大きさに分類できる。中でも、長径3cm未満のものが22,193個あり、字の書かれている一石経全体の60%を占めていることから、かなり小さな石が使われていたことがよく分かる。

これらの一石経は、少なくとも2・3種類の異なる筆跡が認められ、複数の人間により膨大な数の一字一石経を完成させたことになる。

一石経は総数7万個以上にのぼり、経文を復元することは不可能であるが、供養塔に「大乘妙典」と刻まれていることから、この一字一石経の経典は「法華経」と考えられる。^(註1)

(2) 徳利 (第20図63)

器高22cm、胴部最大幅13.5cmを測る一升徳利である。胴部には「明石屋」、裏面には「玄式百拾壺」と棒状の工具で描かれている。これらは、酒屋の号と徳利の番号かと考えられる。全体に灰釉がかかり、焼成は良好である。天保年間以降の作と考えられる。

(3) 湯呑 (第20図62)

器高6cm、口径7.2cmを測る。呉須で草文を描く磁器で、伊万里の製品かと思われる。徳利と同様、江戸後期の作と考えられる。

第6節 歴史的環境

当遺跡の東約500mには国指定史跡長塚古墳をはじめとする「前波の三ツ塚」がある。それらの古墳が造営された同じ恵土段丘面（可茂盆地左岸の中位段丘）の南面に当遺跡は位置している。

当地域は平安時代末には、現可児市下恵土・中恵土、御嵩町上恵土を荘域とした「荏戸荘」であった。

室町時代の初期には上・下両郷に分れ、当遺跡は下郷の東端から約200m西にある。荏戸荘関係文書のいくらかはかつての荘園領主であった京都の醍醐寺や青蓮院等に所蔵されている。^(註2)

長享3年(1489)には、荏戸上郷の代官職を鶴松なる人物に命じている。^(註3) 荏戸荘総社であったといわれる近くの六社神社別当家であった恵土家には「鶴松殿」なる版木が伝世されている。これは代官職であった鶴松は六社神社別当とかかわりがあった可能性が高い。近世に入ると「恵土」と表記される場合が多くなる。また、恵土上・下は下恵土の徳野に屋敷を構えた平岡石見守(1万270石)の徳野藩の所領となる。下恵土は7か村に別れ、当遺跡は宮瀬村となった。が、承応2年(1653)徳野藩が改易されると幕府直轄領として明治維新まで変わらなかった。

宮瀬村の安永7年(1778)の「宮瀬村明細帳」^(註4)によれば、村高144石余、家数26軒、人数86人。宗教関係は恵土六社大明神「恵土荘、惣氏神ニテ御座候」とあり、惣社別当職は三宝院御門跡末流本山兼帯修験神宮寺とある。寺は臨済宗妙心寺派の法雲寺が記載されている。この神宮寺の別当は、可児の修験者

の触頭で本山からの触れは、鶴沼の玉泉院からきて次は土岐郡の日光寺へと伝達されていた。^(註5)この神宮寺の別当から可児郡内の修験者へと伝達されていた。

塚上の石碑は、第13図のように字が刻まれている。そのなかの「尾州犬山徳授寺隠居一□和尚」は、犬山市犬山南古券に現存する臨済宗妙心寺派の古刹「了義山徳授寺」である。その24世和尚に一溪祖滴がいた。一溪祖滴は天保2年(1831)に示寂している。^(註6)建立したのは天保6年3月とあるので4年の隔たりがある。一方、供養塔とあることから、徳授寺の和尚に深く帰依していて、死後の供養のために一石に仏典の各号を一字宛書いたものかも知れない。「可児重興建是」とあるので、可児重興なる人物が当碑を建立している。この可児重興なる人物は宮瀬の墓地・可児姓の家々を尋ね、法雲寺の過去帳をみても手がかりはつかめなかった。一つ考えられることは、宮瀬村出身の者が犬山へ武家奉公に出て、取り立てられていたかも知れないことである。天保7年の不作で8年春が最悪の時期であったので、碑を建立した6年3月はまだ大飢饉といったことはなかった。

- (註) 1 可児市文化財審議会委員梶川正善氏よりご教示していただいた。
2 可児町『可児町史・史料編』(昭和53年刊)…掲載文書24～34。
3 註2文献…掲載文書34。
4 註2文献…掲載文書196。
5 恵土文書 恵土卓氏所蔵。
6 『徳授寺史』(昭和57年刊)

第8章 その他の遺構と遺物

本章では、前章までに含まれない遺構と遺物について記述する。

第1節 遺構 (第14図)

(1) S D 2

マウンドの北から西を囲む溝で、竹の畑への進入を防ぐいわゆる根切り溝である。幅は1.2～1.8m程度、深さは約1.0mを測る。時期は不明である。

(2) S D 3

マウンドの西、石垣の東を赤道に沿って南北に走る溝で、幅0.5～0.9m、深さは現地表から0.65mを測る。所属時期は不明であるが、赤道に沿う溝に関しては、市内宮之脇遺跡で2条検出されている。^(註1)いずれも室町期のものであり、S D 3も同様の時期ではないかと考えている。

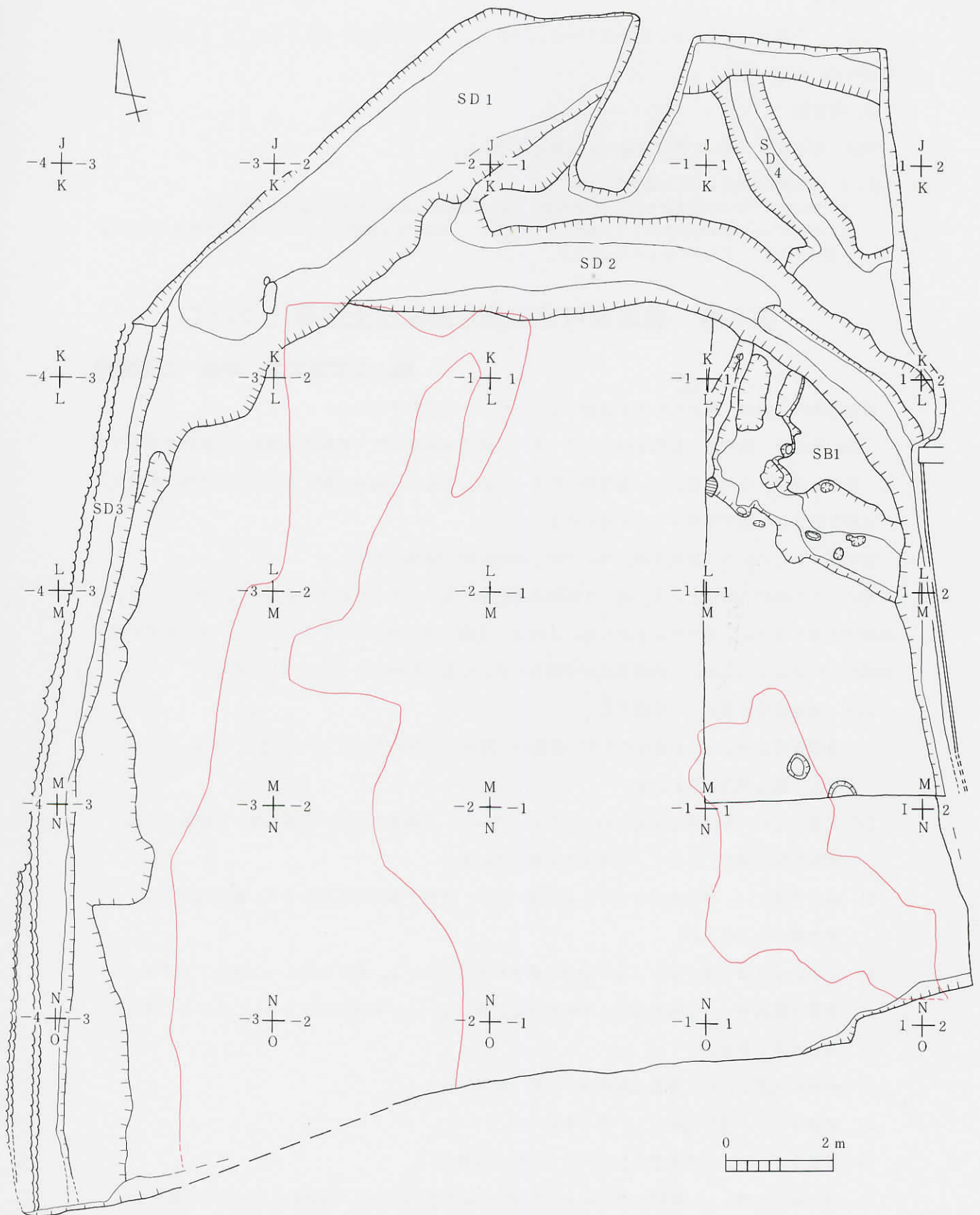
(3) S D 4

I 1、K 1区に位置する短い溝で、S D 1を切る。幅1.06m、深さ0.17mを測る。

第2節 遺物 (第20図57、第21図64・65・66)

(1) 白瓷

64、65は白瓷の椀で、⑱層である礫層から出土している。64はやや細身で、内彎気味のまま外へふんばる三日月形の高台を持つ。体部は直線的に外へ開きながら立ち上がる。内外面とも非常に丁寧なナデ調整を施している。65は64に比べ丸みを帯びた体部を持ち、高台は厚くてしっかりしたものである。調整はナデ調整をするものの、やや雑で高台外面にはケズリ痕が完全に消えてはいない。両者とも虎溪山1号窯式期のものと考えられる。^(註2)



第15図 マウンド外及び下遺構実測図 (S=1/60)

(2) 勾玉

66はメノウ製の勾玉である。第6章でも述べたが、1-8土壌墓のすぐ西から出土している。古墳時代後期のものとする^(註3)。

(3) 叩き石

58は、叩き石で、叩いた面は側面の1ヶ所だけである。

(註) 1 可児市教育委員会『川合遺跡群』1994

2 田口昭二「第3章美濃窯で焼かれた須恵器と白瓷」『美濃窯の焼物』多治見市教育委員会1993

3 年代については長瀬治義氏よりご教示していただいた。筆者が清水経塚のマウンドに古墳の可能性を見出す要因の一つに、この勾玉の出土があげられる。

第9章 岐阜県可児市清水経塚出土焼骨について

椋山女学園大学 学長 江原昭善

清水経塚の人骨は、焼かれた火力は強くないものの、全て焼骨である。

一般に焼骨は、細片化・変形を伴うものであり、時代の特徴や性・年齢等の推定は、極めて困難である。本出土骨は、それに加えて、蔵骨器に収めるため、さらに人為的に細片化され、その際、散逸もしくは取り残された部分も多かったと思われる。

そのようなことから、本出土骨については、推定が特に困難であった。

特に、この時代の傾向として、幼・少年期の死亡率が高いはずであるが、本出土骨の中では、幼・少年期の人骨がほとんど見当たらなかった。これは、火葬により焼失してしまったのか、未成年者の埋葬の扱い方によるものなのか、埋葬形式が不明なため、今後の問題としておくべきであろう。

以下、同定結果を順追って記載する。^(註1)

- 11 骨量非常に少ない。大腿骨の骨片に粗線の一部がよく残っており、よく発達していることから、恐らく成人男性と思われる。
- 14 骨量少ない。骨はほぼ全身にわたって入っている。下顎骨の左右の下顎角部、歯槽部の一部、関節突起が残存しており、老年女性と推定される。
- 15 細片化著しい。骨は非常にきゃしゃで薄いため、女性と推定されるものの、断定はできない。青年期のものらしい。
- 16 火のかぶり余り強くない。ほぼ全身の焼骨片が入っている。細片化著しい。成人。性不詳。
- 17 骨量比較的多い。左側頭骨は、比較的完全に残っている。乳様突起が小さいことから、成人女性と推定できる。
- 19 骨細片化著しいが、骨量比較的多い。性・年齢不詳。
- 20 骨量少ない。細片化著しい。性・年齢不詳。
- 21 骨量中ぐらい。成人男性と思われるが、断定は難しい。
- 22 骨の細片化著しい。植物の根が侵入しており、骨は全て粒状化・砂状化している。骨量少ない。
- 23 骨量少ない。成人。性不詳。
- 26 骨細片化きわめて著しい。骨量極めて少ない。性・年齢不詳。
- 28 骨量極めて少ない。性・年齢不詳。

- 29 骨量少ない。成人。性不詳。
- 31 細片化極めて著しい。骨量極めて少ない。性・年齢不詳。
- 34 骨量極めて少なく、性・年齢不詳。
- 38 細片化極めて著しい。骨量極めて少ない。性・年齢不詳。
- 40 骨量中ぐらい。性・年齢不詳。
- 43 骨の細片化著しく、性・年齢不詳。
- 南東断ち割り部分出土焼骨 骨量極めて少なく、性・年齢不詳。
- 南東礫群一括出土焼骨 骨量極めて少なく、性・年齢不詳。

(註) 1 同定結果の番号は遺物番号である。

第10章 まとめ

今回の清水経塚の調査は、平成7年9月1日から同年11月22日までの約3ヶ月間、現場調査を実施した。この結果、大きく2つの成果を上げることができた。1つめには、江戸時代後期の一字一石経塚をほぼ完全な形で検出することができ、不明な点の多い、一字一石経塚の構造を明らかにできたことである。2つめには、市内のみならず、県内では例を見ない程多数の蔵骨器を伴った中世墓群を検出したことである。

当初は、古墳であるとの見方から、その方向で調査を進めていったものの、主体部の痕跡すら検出できなかった。しかし、マウンドの一部に残る土の盛り方から、当遺跡が元々は、古墳の残丘と思われるマウンドを利用して築かれたものと判断した。そして、中世墓群が築かれ、更にその上に一字一石経塚が築かれて、今日まで至ったことが解明できた。

ここでは、前述の2つの成果について、調査担当者である筆者の所見を交えてまとめとしたい。

第1節 一字一石経塚

岐阜県内での一字一石経塚の発掘調査例は、これまで3つの事例がある^(註1)。年代は当遺跡で出土したような石塔が検出されており、ほぼ特定できていた。しかしながら、経塚の構造となると、完全な形で発掘調査された例がないため、今回ほぼ完全な形で検出できた考古学的な意味は大きいと考えている。更には過去の調査では、一字一石経の一部或いは数が少なかったりするものばかりで、一石経すべてが出土し、その実態が解明でき、以下のような成果が得られたことは意義深い。

すなわち、①一石経は石の数が73,000点余りの膨大な数であること。②すべてに文字が書かれているわけではないこと。③文字は複数の人の手により書かれていること。④石の大きさは大きく4種類に分別できるが、ほとんどが3・4cm未満の石が大半を占める。また、経文を書くのに使用する石は表面がすべすべした玉砂利に使用されるようなものを意識的に使っていること。この4点である。

今回調査を実施して、この経塚を造った「可児重興」という人物がどのような人であったかを文献史料の立場から解明しようと中島勝国先生に依頼したが、現在残っている史料からは解明できなかったことが残念である。この点については、今後新史料が発見されるまでの課題となろう。

尚、当遺跡の北にある宮瀬地区の墓地入り口に小さなマウンドがあるが、これも経塚の可能性が高いと考えている。

第2節 中世墓群

中世墓群は、古墳の残丘を利用しながらその上に新たな土盛りをしてマウンドを築造し、そこへ古瀬戸の壺を中心に利用した蔵骨器を埋納したものである。

蔵骨器の埋納方法には、マウンドに単独で墓壇に埋納したもの。大きめの石で区画をしてその中に墓壇を掘り蔵骨器を埋納し、川原石を積み上げたもの。区画はないが埋納した蔵骨器の上に石を積み上げたもの。更に、第2群上層に見られるが、下層の積み上げた礫群上に蔵骨器を置き、その上に同様な石を積み上げたものの4種類の埋納方法が見られた。また、蔵骨器の上に扁平な石を蓋にしたものや、蔵骨器の底部を抜き、その下に山茶碗の碗を受け皿にしたものもある。蔵骨器の蓋は、当遺跡では全て川原石を使用しているが、一宮市法圓寺中世墓では山茶碗の碗や小皿、知多半島産と考えられる片口鉢を使用している。この点は清水経塚中世墓群の特徴と言えよう。^(註2)

墓塔としては、礫群中から出土している五輪塔が使用されていると考えられるが、全ての蔵骨器に使用されているとは、その出土量から言い切れない。また、五輪塔の代わりに蔵骨器のすぐ側に長い石を立てて、代用しているものもあった。

さて、可児市内では過去4遺跡^(註3)（今渡遺跡、欠ノ上遺跡^(註4)、次郎兵衛塚1号墳^(註5)、長塚古墳^(註6)）で中世墓が調査されている。ここでは、この4遺跡の事例を紹介し、清水経塚を含め、可児市内における中世の墓制のあり方を若干考えてみたい。

まず今渡遺跡から紹介する。この遺跡では、いわゆる土壇墓が合計86基検出されている。これらの中には、焼骨と焼灰が土壇内から出土している火葬墓が29基含まれているが、出土している焼骨は、蔵骨器に納められたものではなく、土壇内に焼骨を埋納したものである。また、土壇内に川原石が入れられているものもあるが、清水経塚で見られるような川原石の集石状態ではない。

欠ノ上遺跡では、3基の中世土壇墓が検出されている。プランは長方形を呈したもので、土壇内には無作為に大小の礫が投げ込まれており、清水経塚のような集石状態になっている。また、土壇内からは古瀬戸の壺等が出土しているが、いずれも完成品には程遠く、蔵骨器とは断定できない。

次郎兵衛塚1号墳では第一平坦面から、清水経塚と同様な形態の中世墓が11～13基検出されている。南西部分では古墳の葺石を利用した石組遺構が遺存しており、下面には扁平な川原石を敷き詰めている。プランは約3m×2.5m程度の方形をしており、区画を持つタイプと考えられる。蔵骨器は攪乱されていたため、原位置を保っていなかったが、古瀬戸の四耳壺や瓶子類が付近から出土している。また、東副室の直上では、直径1.6mの円形プランを呈し、外側にやや大型の川原石を敷き巡らせ、内側には小さめの円礫を詰めた集石墓が検出されており、これも区画を持つタイプに該当する。ここからは底部穿孔された、遺存のよい常滑産のすり鉢が出土している。このほか、平坦面の石を多少掘り窪め、川原石を敷いた火葬址も検出されている。更に墳頂部からも五輪塔の一部が出土している。

長塚古墳でも第1次調査では後円部の第一平坦面で、大型の常滑産の甕を蔵骨器とし、その上に川原石の集石を持つ中世墓が検出されている。また集石中より古瀬戸の瓶子も出土している。ただし、大甕の中から人骨は出土していない。また、長塚古墳周辺には、五輪塔の一部の石が所々に顔を覗かせており、次郎兵衛塚古墳と同様、古墳が中世の墓域となっている。

さて、ここまで可児市内で過去に調査された中世墓を紹介してきた。これに清水経塚の例を加えてみ

るとタイプとしては大きく2つに分類できる。一つは清水経塚、次郎兵衛塚1号墳、長塚古墳の事例のように、蔵骨器を埋納した後にその上部に川原石を積み上げ、或いは集石したタイプである。もう一つは、蔵骨器を伴わず、直接土壌内に埋納する今渡遺跡のタイプである。欠ノ上遺跡は蔵骨器は確認されていないが、集石を伴うという点を重視するならば、前者のタイプに含めるべきであろう。このタイプの違いは何に由来するものなのかを考えた場合、考古学的には実証できるものは何もない。また、現在わかっている文献史料にもそれを実証するものはない。これは筆者のあくまでの推測であるが、被葬者の違いによるものではなかろうか。この考えを支持するに足りるだけの根拠とはならないだろうが、今渡遺跡には、墓塔として使われる五輪塔は出土していない。今渡遺跡は中世の墓域として使われた後、一時的な中断はあるものの、わずかに南へ墓域を変えて現在まで今渡地区の墓地として使用されている。そして15年ほど前迄は、火葬ではなく土葬で埋葬が行われていた。これを踏まえるならば、今渡遺跡の被葬者は一般の庶民階層ということになろう。これに対して、より丁寧に蔵骨器に火葬骨を納めて埋納し、その上に川原石を積み上げて、更に墓塔として五輪塔をその上に置く清水経塚のタイプの被葬者は、当時の有力者、恐らくこの地域の有力武士階層ではないだろうか。現在、文献として当時の様子を記した史料は確認されていないため、ここでは推測の提示だけにとどめておき、今後の事例の増加を待ちたい。

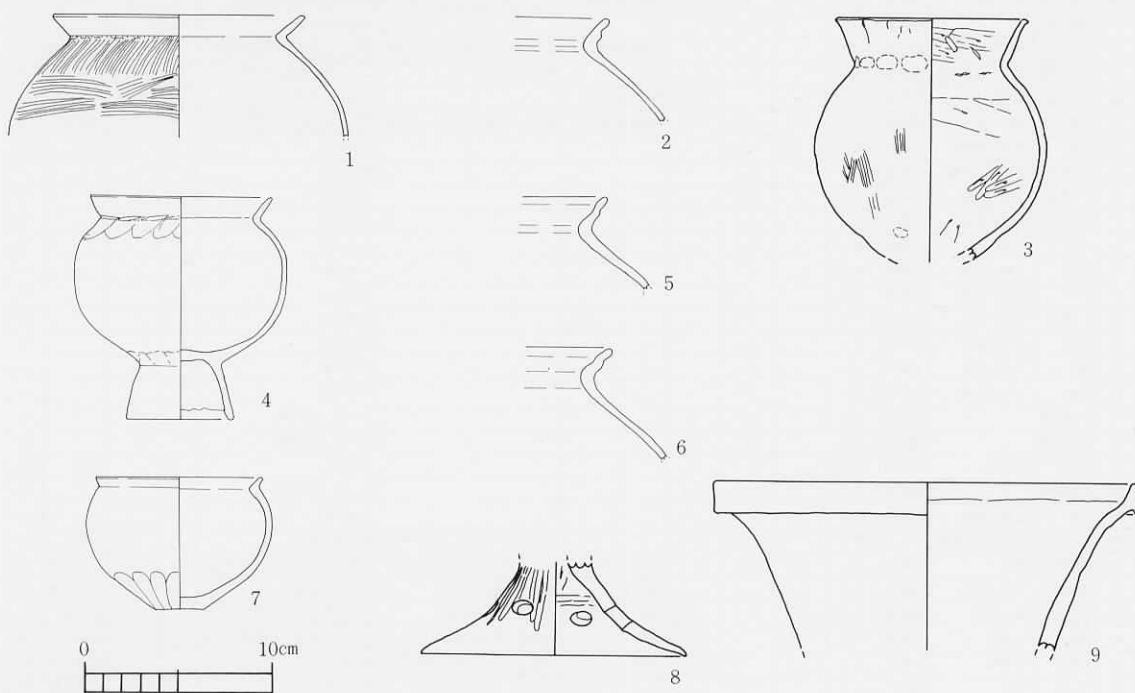
以上、今回の調査で得られた成果を筆者の見解を若干交えながら、大きく2つにまとめてきた。

本書が今後の中世における埋葬の在り方を解明する上で少しでも役立つならば、ここに埋葬された人々の供養になるであろう。そんなことを願いながら筆を置くことにする。

(註) 1 岐阜市1基と恵那市2基の合計3基

2 この特徴の意味というわけではないが、一宮市法圓寺中世墓では、壺等の蔵骨器の口縁部をうち欠いたものは少ないのに対し、当遺跡では10点と全体の1/3弱を占めており、これが蓋の差異の一因とも考えられる。

3 岐阜県教育委員会『今渡遺跡』1984



第16図 出土遺物実測図 (1) (S=1/4)

- 4 可児町教育委員会『欠ノ上遺跡発掘調査報告書』1979
 5 長瀬治義「第5章川合古墳群」『川合遺跡群』可児市教育委員会1994
 6 高橋克壽「IV調査成果」『国指定史跡長塚古墳発掘調査概要報告書』可児市教育委員会1997

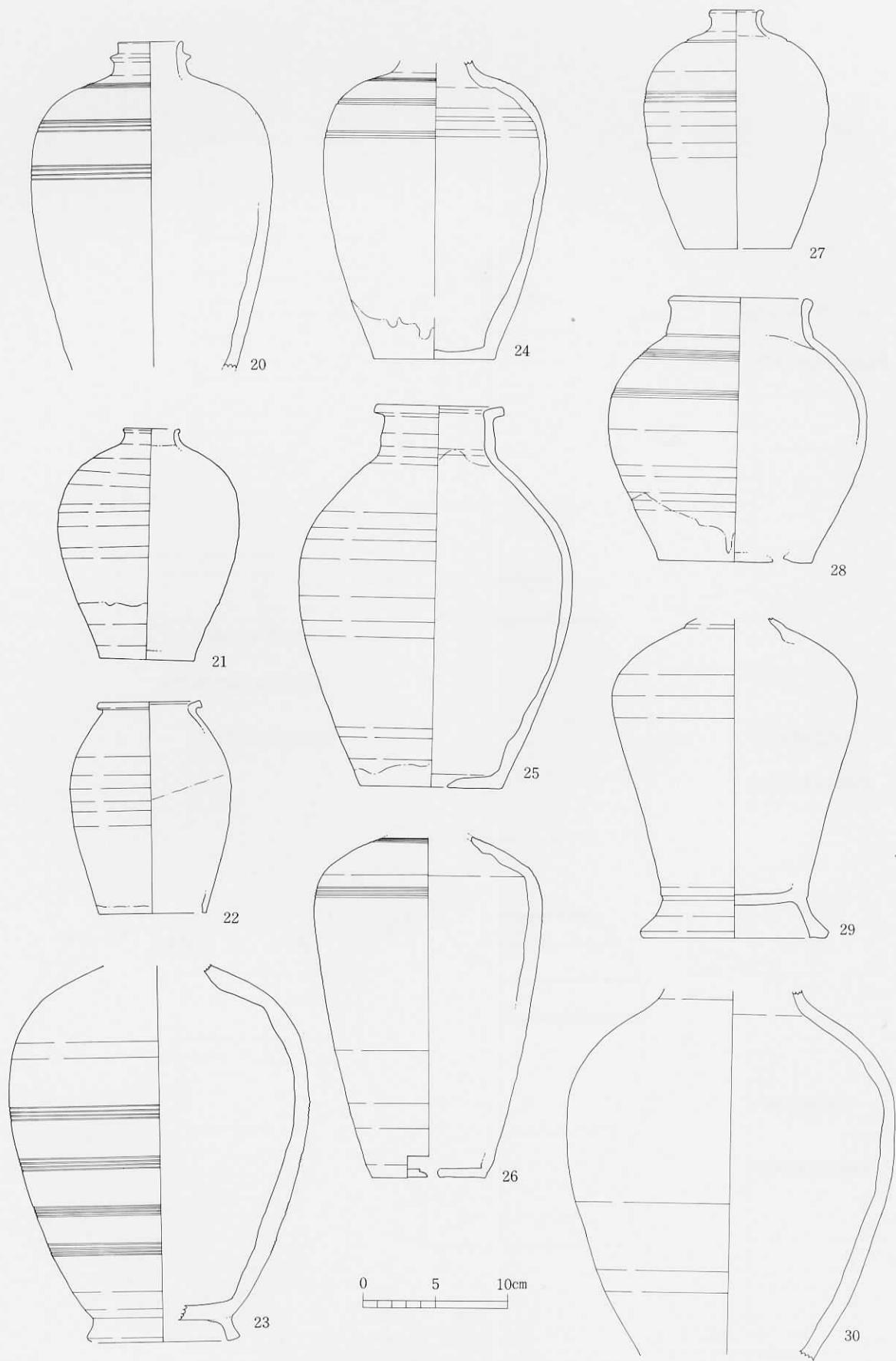
参考文献 関 秀夫『経塚地名総覧』ニューサイエンス社1984

遺物番号	出土遺構及び居住位	器種	器種用途	器高(長さ)	口径	胴径(軸)	底径(厚さ)	軸葉	成形・調整	特記事項	穿孔有無	取り上げ番号	時期	残存率	
1	SB1F	くの字(台付)甕	煮炊具	(5.2)	12.9	(17.4)	—	—	ハケメ、内面指頭痕、内面ナデ	口縁端部外面スス付着	—	—	宮A 前田期新	10	
2	SB1F	S字甕	煮炊具	(5.4)	—	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ、ハケ目口頸部まで	色調は淡赤褐色、S字甕C類	—	—	宮A 前田期新	5	
3	SB1F	くの字甕	煮炊具	(12.9)	9.9	12.3	—	—	外面ハケ後ナデで消す、内面ミガキ	外面スス付着	—	—	宮A 前田期新	40	
4	SB1F	くの字台付甕	煮炊具	11.8	9.4	11.3	5.5	—	ナズリ後ナデ、内面ナデ、口縁部内外両面に上るナデ、薄平部内外両面に上るナデ、口縁部内外両面に上るナデ、口縁部内外両面に上るナデ	—	—	宮A 前田期新	80		
5	SB1F	S字甕	煮炊具	(4.9)	—	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ、ハケ目口頸部まで	S字甕C類	—	—	宮A 前田期新	5	
6	SB1F	S字甕	煮炊具	(6.8)	—	—	—	—	外面ハケメ、内面ナデ、ハケ目口頸部まで	S字甕C類	—	—	宮A 前田期新	5	
7	SB1F	鉢	供膳具	7.0	8.7	9.9	2.5	—	外面下部ケズリ後ナデ、内面底面付近ミガキ、その他ナデ	スカシ孔、2個一対で計4個	—	—	宮A 前田期新	20	
8	SB1F	有段高杯	供膳具	(4.8)	—	—	14.0	—	外面ミガキ、内面ナデ	—	—	—	宮A 前田期新	10	
9	SD1底	広口壺	貯蔵具	(8.9)	23.6	—	—	—	—	内外面とも摩耗著しい	—	—	山中期	10	
10	2群-1次	瀬戸四耳壺	蔵骨器	(6.0)	—	20.0	—	—	灰釉(灰緑色)	頸部内面指頭痕その後ナデ	軸ハクリ、蓋有	—	14	前II期	10
11	3群-2次	瀬戸四耳壺	蔵骨器	25.7	10.0	19.1	10.1	—	灰釉(黄緑色)	ナズリ後ナデで消す、口縁部内外両面に上るナデ	軸一部ハクリ	有	10	中III-IV期	95
12	3群-1次	瀬戸三耳壺	蔵骨器	23.2	10.8	15.6	9.4	—	灰釉(黄緑色)	内面柄子成形後ナデ、底面外縁部ナデ調整(ク)	口縁部内面釉たれる	有	—	中I-II期	70
13	3群-3次	瀬戸三耳壺	蔵骨器	(29.1)	—	17.0	9.2	—	灰釉(淡黄色)	内外面ともナデで消す	軸ハクリ、口縁部欠損	有	3	中I-II期	80
14	2-6集石墓	瀬戸三耳壺	蔵骨器	14.2	6.6	12.7	7.2	—	灰釉(淡緑色)	ナズリ後ナデで消す、無軸部分ケズリ後ナデ調整(ク)	軸ハクリ、蓋有(55)	有	34	中I-II期	100
15	2群-1次	瀬戸三耳壺	蔵骨器	23.2	10.8	15.6	9.4	—	灰釉(淡緑色)	内外面ともナデで消す	口縁部内面釉かける。蓋有	有	15	後I-II期	95
16	3群-1次	瀬戸四耳壺	蔵骨器	(24.9)	—	19.8	11.4	—	灰釉(黄緑色)	内面ナデ推、指頭痕有	上部一部軸ハクリ、口縁部欠損	有	22	後I-II期	95
17	2-1集石墓	瀬戸三耳壺	蔵骨器	33.0	13.0	26.0	12.5	—	灰釉、軸ハクリ	輪積みロクロ成形後ナデ	内面茶色に変色した部分有、蓋有(56)	無	21	後I-II期	100
18	2群-1次	瀬戸四耳壺	蔵骨器	(19.2)	10.7	19.5	—	—	灰釉(淡緑色)	内面ナデで消す、沈線強く引かれる。	口縁部内面一部軸ハクリ(底部有)	(有)	16-1	中III-IV期	60
19	2群-2次	瀬戸四耳壺	蔵骨器	(26.7)	—	21.7	9.0	—	灰釉(灰緑色)	—	軸ハクリ、口縁部欠損	有	30	前II期	95
20	3群-1次	瀬戸瓶(梅瓶型)	蔵骨器	(22.4)	4.4	16.7	—	—	灰釉(淡緑色)	内面ナデ	上部内面約与軸かかる。底部欠損	—	23	中III-IV期	70
21	2-6集石墓	瀬戸瓶	蔵骨器	15.9	3.7	12.5	6.5	—	灰釉(黄緑色)	底部糸切後推ナデ、外面無軸部分調整推	蓋有(58)	無	35	中III-IV期	100
22	3群-1次	瀬戸瓶	蔵骨器	(14.7)	7.0	11.2	—	—	錆釉、内面鉄釉	肩部以上内面ナデ、肩部以上内面柄子成形後ナデ	内面筋部最大径まで釉かける。底部欠損	—	28	後期	70
23	3群-1次	瀬戸(三 or 四)耳壺	蔵骨器	(25.9)	—	20.7	10.5	—	灰釉、軸ハクリ	外縁部以上内面ナデ、外縁部以下内面柄子成形後ナデ	蓋有、口縁部欠損、肩部付近に、ナデによる接合痕	有	24	中III-IV期	80
24	2群-1次	瀬戸瓶(梅瓶型)	蔵骨器	(20.4)	—	15.3	8.3	—	灰釉(淡緑色)	輪積みロクロ成形、内外面で消す	口縁部欠損	無	17	後I-II期	50
25	2群-1次	瀬戸瓶	蔵骨器	26.3	8.8	18.8	9.8	—	錆釉、内面底面まで鉄釉(うすナデ)	頸部内面以下柄子成形後ナデ	口縁部内面は外面の釉かかる	有	13	後期	55
26	2-2集石墓	瀬戸瓶(梅瓶型)	蔵骨器	(23.4)	—	15.8	7.8	—	灰釉	ナデで消す、内面柄子成形後、整形推	軸ハクリ、口縁部欠損	有	29	前III期	80
27	3群-1次	瀬戸瓶	蔵骨器	16.4	3.8	12.8	7.4	—	灰釉(黄緑色)	内面柄子成形後、底面糸切り痕	—	有	26	中V期	95
28	2群-1次	瀬戸瓶	蔵骨器	18.2	9.2	18.0	10.7	—	灰釉	内面ナデで消す、無軸部分、ケズリ完全に消す。糸切り痕	口縁部内面釉	有	6	後I-II期	90
29	2群-1次	瀬戸瓶(縮腰型)	蔵骨器	(22.0)	—	17.0	12.7	—	灰釉(淡緑色)	輪積み成形、内面ナデで消す	部分的に軸ハクリ、口縁部欠損、底面は釉かける	無(?)	5	後I期	85
30	1-8土塚墓	常滑壺	蔵骨器	(25.0)	—	22.7	—	—	胎土砂粒多、内外面ともナデ	口縁・底部欠損、底部の代わりに石(57)	—	4	6a・b	70	
31	2群-1次	瀬戸瓶	蔵骨器	(11.5)	—	10.8	6.2	—	灰釉(淡黄色)	柄子成形後、ナデ調整	軸大半ハクリ、糸切り痕	無	12	中III-IV期	70
32	1-4集石墓	瀬戸瓶(縮腰型)	蔵骨器	(15.5)	—	12.5	—	—	鉄釉	内外面ナデで消す	底部穿孔細く消す(焼成前穿孔径3mm)	有	11	後III期	20
33	2群-1次	瀬戸水注	蔵骨器	15.5	3.0	15.6	8.9	—	灰釉(淡黄褐色)	内面柄子成形、無軸部分ケズリの。肩部以上ナデ、糸切り痕	口縁部内面釉かかる。軸ハクリ	有	16-2	中III-IV期	80
34	2-5集石墓	瀬戸水注	蔵骨器	(18.1)	6.0	12.9	—	—	灰釉(黄緑色)	輪積み成形後ナデ、外縁部以上内面柄子成形後ナデ調整(ク)	軸ハクリ、底部欠損、受け皿(35)有り	—	31	中I-II期	90
35	2-5集石墓	山茶碗	蔵骨器受皿	4.2	12.9	—	4.5	—	—	内外面ともにナデ、高台モミグツク。糸切り痕	口縁端部に自然釉、34の受け皿	—	31	大興、大淵	100
36	3群-1次	瀬戸瓶(梅瓶型)	蔵骨器	(16.8)	—	15.2	9.8	—	灰釉(黄緑色)	柄子成形後内外面ナデ、糸切り後ナデ	肩部以上欠損	有	25	前III期	40
37	M-区上層	瀬戸壺	蔵骨器	(8.2)	—	11.4	—	—	灰釉(淡緑色)	内面ナデ推	集石中からの出土でない	有	1	中III-IV期	10
38	3-集石墓	瀬戸水注	蔵骨器	13.4	2.6	14.4	8.0	—	灰釉(淡黄褐色)	ナデ調整、糸切り痕、底部に切り離し時の粘土付着	軸は底部までたれる。与軸ハクリ	有	9	中III期	95
39	2群-1次	—	蔵骨器蓋	11.3	—	13.2	6.3	—	—	—	—	—	—	100	
40	2群-1次	瀬戸水注	蔵骨器	(12.0)	—	14.3	—	—	灰釉(黄緑色)	輪積み、内面整形時の(指)ナデ痕	頸部以上欠損、底部無軸部分有	—	20	中I-II期	70
41	2-5集石墓	瀬戸(三 or 四)耳壺	蔵骨器	(20.8)	—	21.2	12.2	—	灰釉	内外面ナデで消す	軸ハクリ、肩部以上欠損	無	32-33	中III-IV期	50
42	2群-1次	瀬戸壺	蔵骨器	(4.6)	—	10.3	—	—	灰釉(淡黄色)	—	内面釉かける	不明	19	後期	95
43	3-集石墓	瀬戸水注	蔵骨器	18.9	7.3	14.2	6.8	—	灰釉(黄緑色)	外面及び口縁部内面ナデ、糸切り痕	軸ハクリ、底部まで釉たれる。口縁部内面釉かかる	有	27	前IV期	10
44	不明	五輪石空風輪	五輪塔	19.5	—	12.9	—	—	—	—	—	—	—	100	
45	2-4集石墓	五輪石空風輪	五輪塔	19.0	—	12.9	—	—	—	—	—	—	—	100	
46	2-4集石墓	五輪石火輪	五輪塔	12.0	—	20.4	—	—	—	—	—	—	—	100	
47	1群-1次	五輪石火輪	五輪塔	11.5	—	23.8	—	—	—	—	—	—	—	100	
48	不明	五輪石火輪	五輪塔	12.6	—	21.9	—	—	—	—	—	—	—	100	
49	不明	五輪石火輪	五輪塔	12.2	—	21.7	—	—	—	—	—	—	—	100	
50	不明	五輪石火輪	五輪塔	11.2	—	19.8	—	—	—	—	—	—	—	100	
51	2-4集石墓	五輪石火輪	五輪塔	14.9	—	22.5	—	—	—	—	—	—	—	100	
52	不明	五輪石水輪	五輪塔	15.0	—	18.0	—	—	—	—	—	—	—	100	
53	2群-1次	五輪石水輪	五輪塔	14.8	—	21.7	—	—	—	—	—	—	—	100	
54	不明	五輪石水輪	五輪塔	19.0	—	25.0	—	—	—	—	—	—	—	100	
55	2-6集石墓	—	蔵骨器蓋	12.6	—	12.7	4.5	—	—	—	—	—	—	100	
56	2-1集石墓	—	蔵骨器蓋	13.5	—	16.7	4.6	—	—	—	—	—	—	100	
57	不明	叩き石	調理具	12.3	—	11.3	6.6	—	—	—	—	—	—	100	
58	2-6集石墓	—	蔵骨器蓋	12.1	—	10.1	4.4	—	—	—	—	—	—	100	
59	不明	五輪石地輪	五輪塔	22.0	—	20.9	9.0	—	—	—	—	—	—	100	
60	3群-1次上面	石造阿弥陀如来坐像	石仏	28.6	—	15.9	10.2	—	—	表面で消す。仕上げ、裏面粗い成形	—	—	—	100	
61	経塚墓壇面	徳利	供膳具	22.6	3.5	14.2	10.7	—	灰釉(灰緑色)	ケズリ後ナデ、底部は糸切り後ケズリ	「明石屋」玄式百拾巻のへら書き有	—	2	江戸後期	100
62	経塚墓壇面	湯呑み茶碗	供膳具	6.3	7.1	7.3	3.5	—	透明釉	成形・調整とも丁寧	伊万里の製品か	—	2	江戸後期	100
63	マウンド北面前面	瀬戸香炉	供膳具	4.4	10.5	11.4	3.2	—	灰釉(淡緑色)	ナデ調整、糸切り痕	底部内面上に重ね焼きの別個体基部付着	—	—	後II期	80
64	③層中	白瓷碗	供膳具	4.0	12.8	—	7.1	—	灰釉	内外面ナデで消す	軸は口縁端部から脚部迄程度までうすらふとかけ	—	—	虎沢山1号	50
65	③層中	白瓷碗	供膳具	4.0	11.8	—	6.6	—	灰釉	内外面ナデで消す、高台上半分はケズリしている	軸はハクリ	—	—	虎沢山1号	40
66	M-2区	勾玉	副用品(?)	3.4	—	1.0	—	—	—	—	—	—	—	古墳後期	100

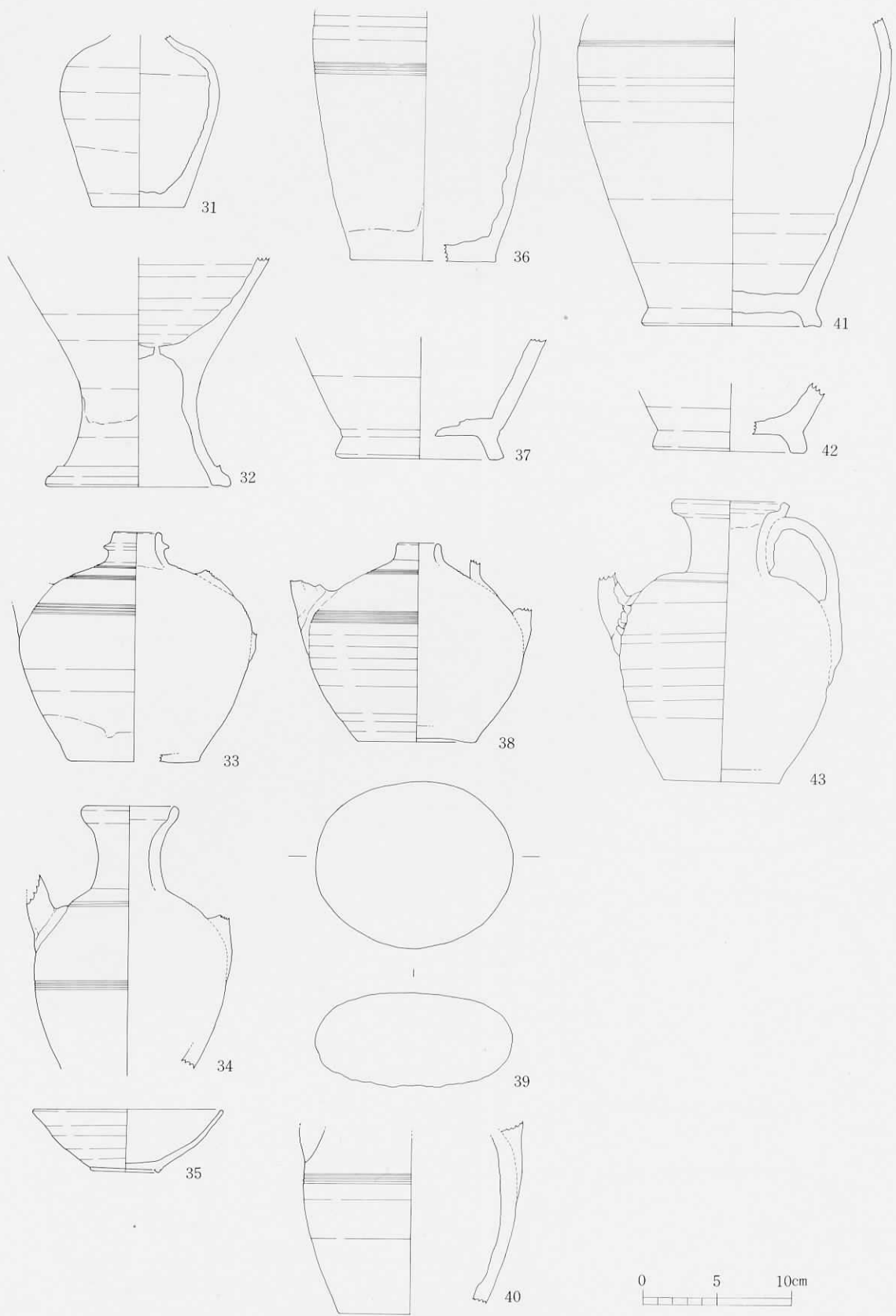
第2表 遺物観察表



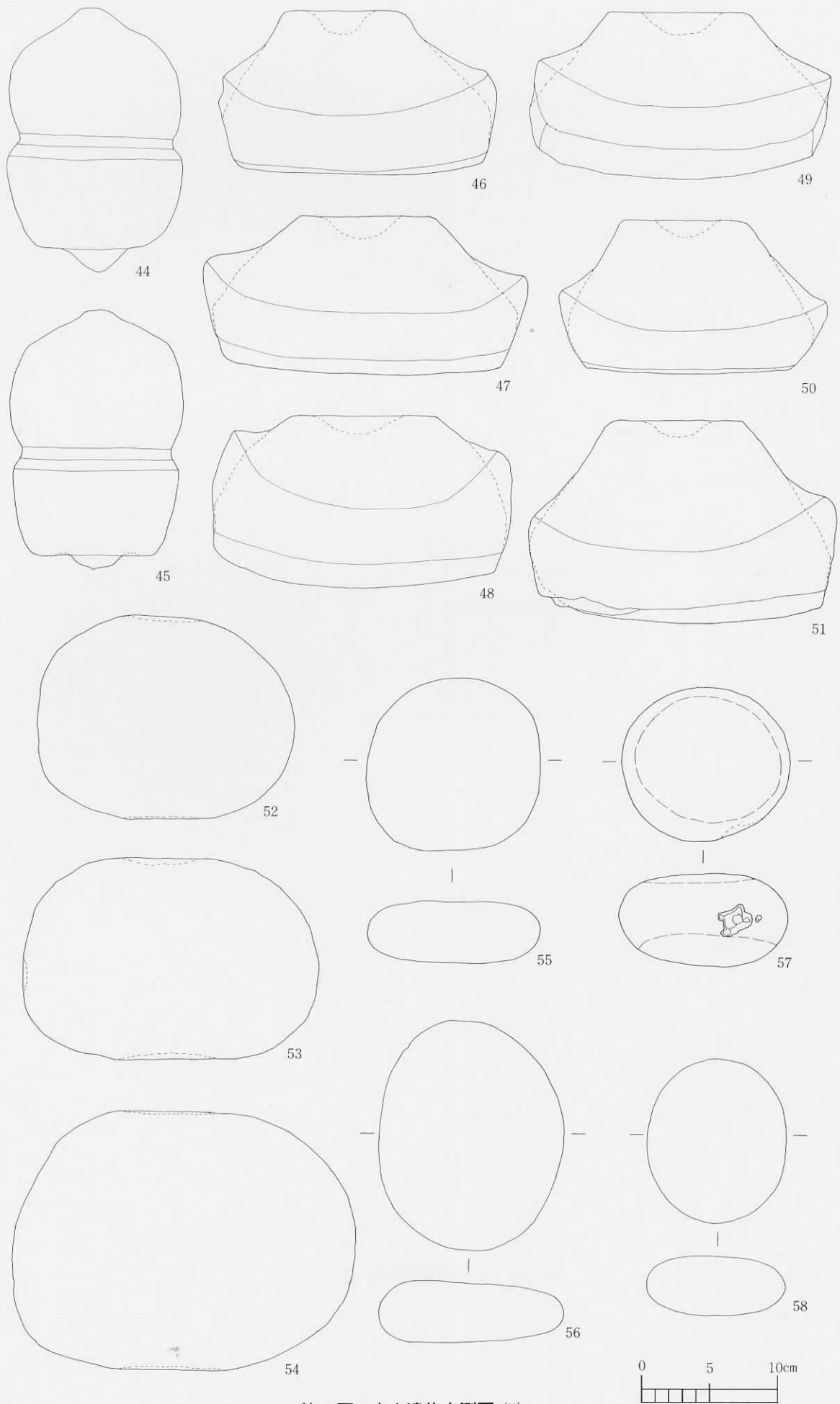
第17図 出土遺物実測図(2) (S=1/4)



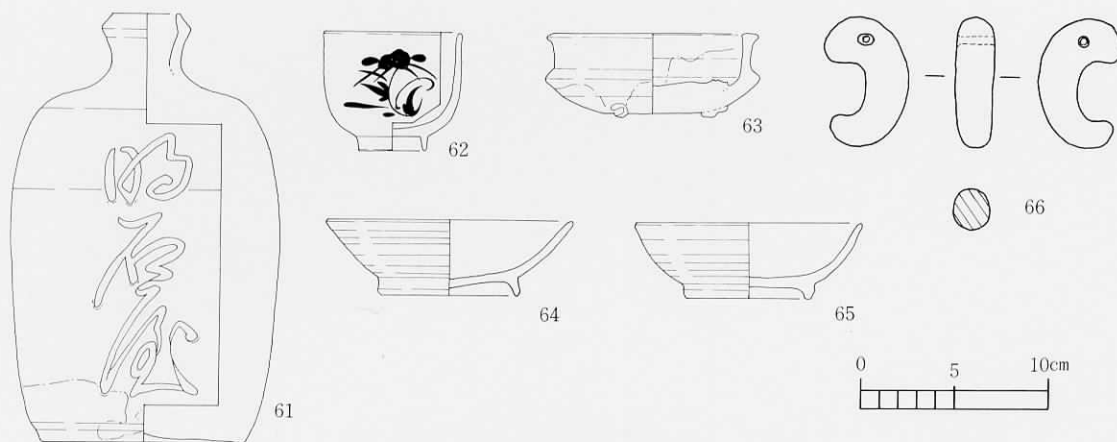
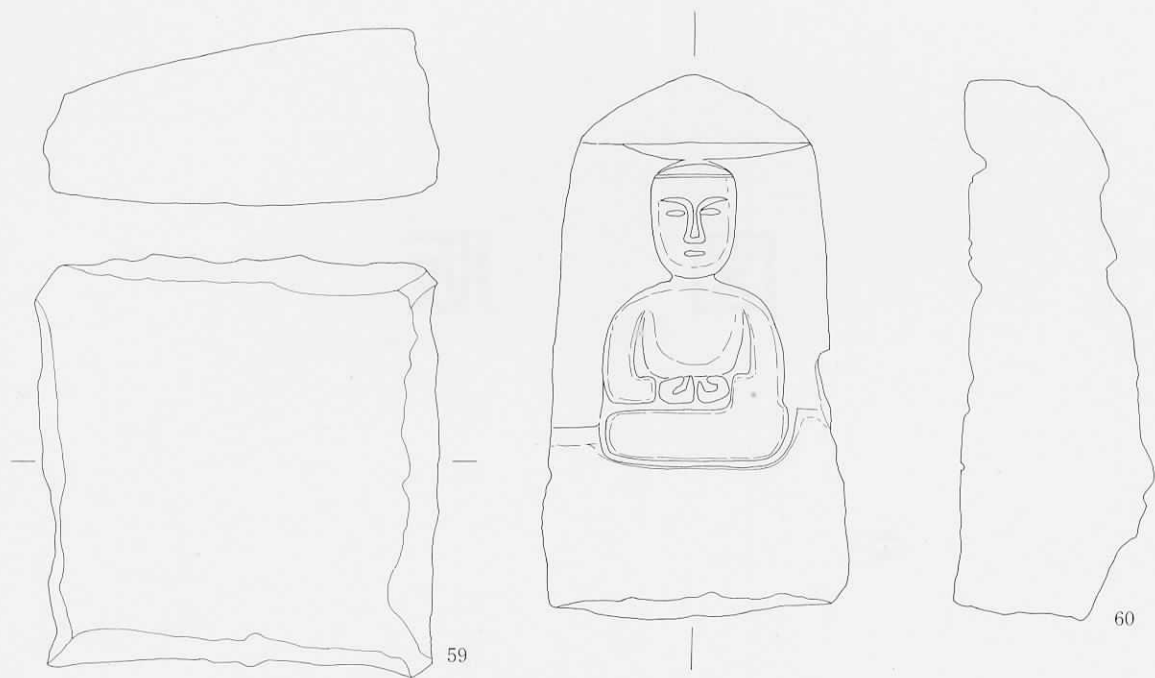
第18図 出土遺物実測図(3) (S=1/4)



第19図 出土遺物実測図(4) (S=1/4)



第20図 出土遺物実測図(5)



第21図 出土遺物実測図 (6) (66のみ S = ½ 他は¼)

圖 版



発掘調査前



経塚供養塔出土状態



経塚関連遺構・遺物検出状態



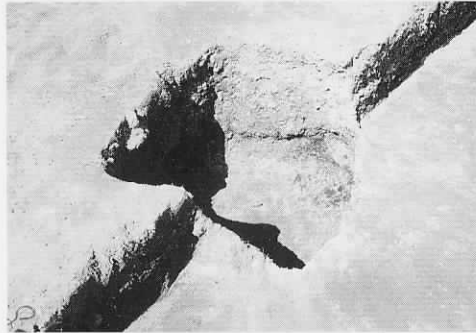
経塚方形基壇



経塚関連遺物 (61、62)



経塚埋納土壌及びび一字一石出土状態



経塚埋納土壌完掘時



経塚埋納土壌断面



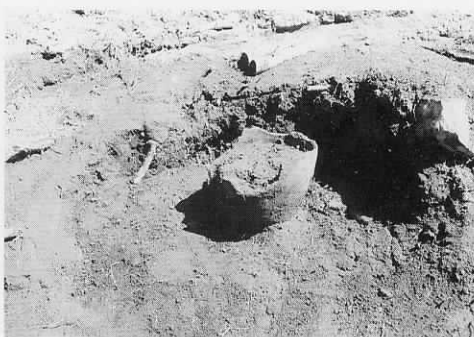
南東集石上面



中世墓第1群



1-3 (手前)・4 集石 (奥の遺物は32)



1-8 土墳墓 (30)



中世墓第2群1次遺構面



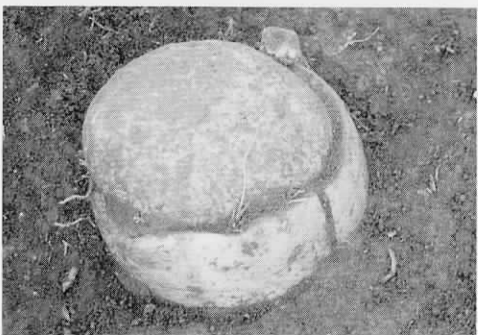
29出土状態



28出土状態



15出土状態



40出土状態



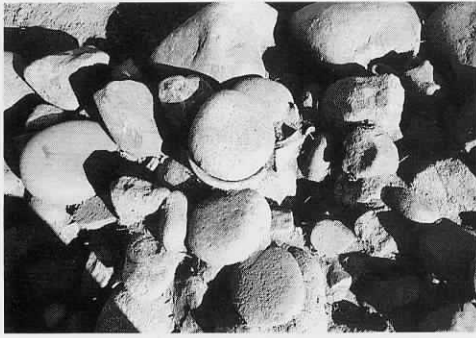
40出土状態断ち割り後



中世墓第2群2次遺構面



2-1 集石墓



2-1 集石墓内17出土状態



2-1 集石墓断ち割り後



2-2 集石墓



2-3 (手前)・4 集石



2-5 (手前)・6 集石墓



2-5 集石墓内34、35出土状態



2-6 集石墓内14 (右)、21出土状態



2-6 集石墓断ち割り後 (左14、右21)



中世墓第3群1次遺構面上面 (北から)



中世墓第3群1次遺構面 (西から)



20、16、38出土状態（左から）



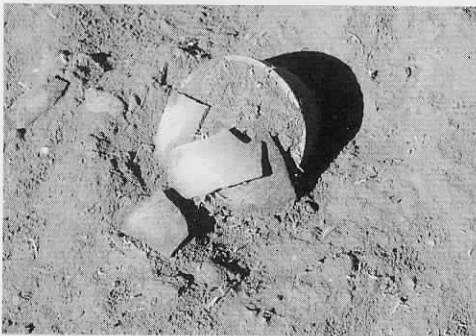
38出土状態



11出土状態



43出土状態



22出土状態



S B 1（北から）



S D 1（西から）



一字一石供養塔



⑱層断面



1 · 2



3



4



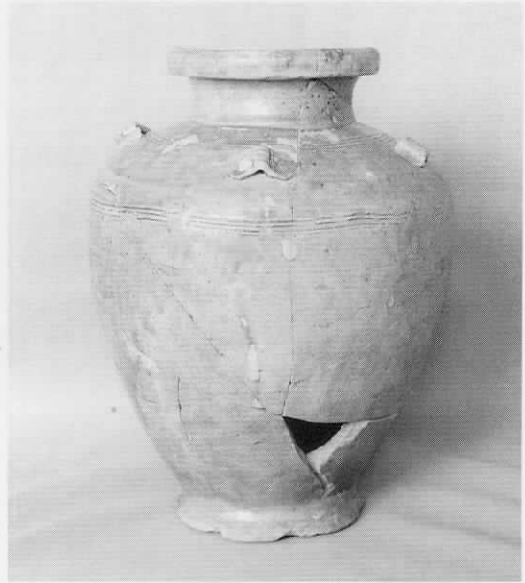
7



8



9



11



12



13



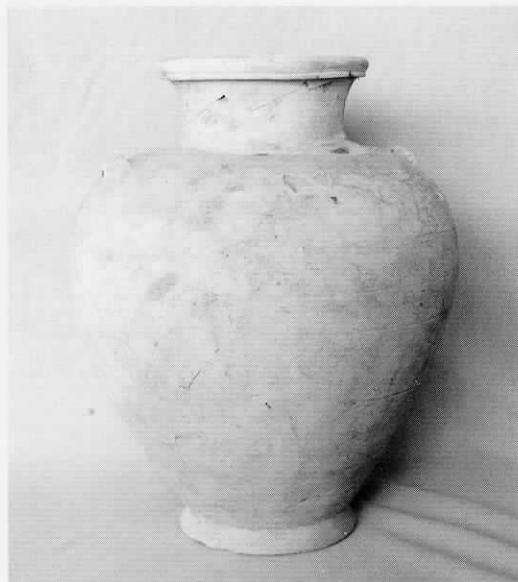
14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34(右) · 35



38



40



41



43



60



61



62



一字一石經



64



66

報告書抄録

ふりがな	しみずきょうづか						
書名	清水経塚						
副書名	市道中恵土広見線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻名							
シリーズ名	可児市埋文調査報告						
シリーズ番号	29						
編集者名	吉田正人						
編集機関	可児市教育委員会						
所在地	〒509-0292 岐阜県可児市広見1丁目1番地						
発行年月日	西暦1999年2月1日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード		北緯	東経	調査期間 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
しみずきょうづか 清水経塚	ぎふけんかにし 岐阜県可児市 しもえどあざしみず 下恵土字清水 48番地の2、49番地	21214	04723	35° 25′ 40″	137° 03′ 50″	19950901 } 19951122 100㎡	市道建設 に伴う緊 急発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
清水経塚	経塚 中世墓	古墳時代前期 中世 江戸後期	中世墓群 一字一石経塚1墓 竪穴住居址1軒 溝4条	古瀬戸等蔵骨器 33個体 一字一石経 73,343点 古式土師器 弥生土器		・中世の集石墓群の 検出とそれに伴う 蔵骨器の大量出土 ・一字一石経塚の完 全発掘	

可児市埋文調査報告29

清水経塚

市道中恵土広見線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成11年1月25日印刷

平成11年2月1日発行

編集・発行 可児市教育委員会

〒509-0292 岐阜県可児市広見1丁目1番地

T E L 0574-62-1111

印刷 (株) 太洋社